

が揖斐郡坂内村の木地屋が使っていたものであることを確認しておきたい。

概要は次のようなものである。まず木質から見て非常に新しい資料で、様式的にも伝統的な手引ろくろの形からいくぶん離れた印象がある。基本構造はタテ受型で直通の軸に4本平行型の爪を持つ伝統的な構造であるが、印象の新しさは、形態的にみて各部のパーツの比率が伝統的なろくろの様式から外れていることから来るのだろう。まず軸長 560 mm に対して軸径が 76 mm と非常に太い。軸頭も径 73 mm と変わらず、爪は短いものが 65 mm の幅で取り付けられている。恐らく盆、鉢などの大径の器を挽いたものだろう。軸に長いひび割れが入っていることから後部軸端にも補強のための金輪が付いている。台は縦 690 mm、横 265 mm の長方形で、直方体の後部軸受が台の上に載っているように見えるが二木式ではなく一木を削り出したもの。注油孔の蓋が横からのスライド式であるところは郡上市の寒水 (A) に見られたものと同じである。

(5) 岐阜県の木地屋について

岐阜県のろくろについて 11 点の資料の概要を見てきたが、ここでそれぞれの構造的特徴の相互関連を見ながら、これらの道具を使ってきた木地屋の来歴について検討してみたい。

まず材質が新しく、構造的にも伝統的な様式からは外れていると思われる資料について検討する。(調査台長番号 11) (以下「番号 11」と略記) は高山市所蔵の「飛驒の山村生産用具」の一つだが、調査カードのデータでは、大野郡荘川村で明治初期に作られたもの(製作者不明)を清見村で使っていた(使用者不明)とある。寄贈者名は記されているが、製作も使用も別人のようで、購入等による所有であったと思われる。荘川村は白山の東麓にあり、加賀と接する飛驒の奥地である。また清見村はその隣村で、『清見村誌下巻』によれば江戸中期の享保年間(1716~35)から蛭谷の氏子駄帳に記録が残っていることから、⁽⁶⁾相当古くから木地屋が入っていた土地である。しかし、改めて資料を見てもそうした古い歴史の中で使い続けられてきた様式とは思えず、何らかの技術の変革があったか、明治以降新規に参入した木地屋の製作になるか、どちらかであろう。

次に「番号 12」(飛驒市「飛驒の山樵館」所蔵)の資料について、そのユニークな構造が際立っているが、どのような木地屋が使ってどういう系譜を持つのか。しかし文化財調査カードの記録では、資料の採集地は大野郡白川村牛首ということがわかっているだけで製作者、使用者不明である。木地屋が飛驒に入ったのは先述したように江戸の半ば享保年間に入ってからとされ、この資料の採集地大野郡白川村の記録は延享4年(1747)の蛭谷氏子駄帳が初出である。⁽⁷⁾白川村は越中と境を接する飛驒の最奥地で白川郷として知られる所である。調査カードにある採集地牛首は国道 156 号からそれて越中との境の牛首峠に至る山道の奥にあり、氏子狩を受けた木地屋が多く入っていたとされる大白川谷とは反対の山麓になる。或いは氏子狩を受けることなく古くに分派した木地屋の系統で、技術的にも孤立した流れを持っていたのかもしれない。いずれにしても類似の資料が他に確認できればもう少し追究できるかもしれないが、現状では難しいと言わざるをえない。それほど他の資料との

系統的接点のない資料である。

岐阜県博物館所蔵の「番号 27」の資料については、先述したように電話による聞き取り調査を行い、かなり詳しい由来が判明している。聞き取りの概略は以下のような内容であった。「この資料を使っていたのは揖斐郡坂内村広瀬地区の木地屋（小椋家）で代々木地屋の家系。移住の経路は明治時代は根尾村に、大正ごろに久瀬村に移りその後坂内村にきた。昭和の初めごろまでは枡の木で椀木地を作り和歌山の業者に出していた。昭和 20 年代には枡の木が無くなりお椀作りからお盆や小鉢造りに移行した。資料館にある資料は、昭和 20 年ころにお盆製作用に本人或いはその親が作ったろくろである。しかし伊勢湾台風で村が大きな被害を受け、木地屋はろくろの仕事から家具製作などの仕事に変わっていった。従って新しく作ったろくろはほとんど使わないで終わった。同家が名古屋に出るときに、縁があつて預かったものを博物館に寄贈した。広瀬地区には当時三軒の木地屋があり、小椋姓でみな親戚関係にあつたが、今は引っ越してしまつて一軒もない。」（広瀬基一氏談⁽⁸⁾）

このことから判断すれば、やはり当初から大物用としてそれに特化した設計のろくろであつたことがわかる。木材が新しいこと、形態が伝統的なろくろと比べてずんぐりしていることもこれで理解できる。

岐阜県内の資料として残る 8 点について相互の関係について検討してみたい。

まず「番号 24」の明宝歴史民俗資料館の資料と「番号 25」の寒水の和田家の資料は歴史的にも同じ系統に属していると見ていいだろう。「番号 25」の紀年銘からもわかるように和田家はかつて小椋姓であつたが、現在地に定着してから和田に改姓したという。明宝の「番号 24」も同じく寒水の和田家（別家）の先祖が使っていたもので、同じタテ受型のろくろで共通の特徴を持つ。他に見られない細かな一致点として、後部軸受の穴の内壁に黄銅片を貼り付けていることである。これが当初からのものか後年使い込んだのちに、そうした細工が必要となったものか、恐らく後者ではないだろうか。と言うのもよく似た構造であるにも関わらずこの二つの製作年代には 200 年近い開きがあるからだ。先にみたように「番号 24」の調査カードには製作年代が寛文年間（1661～72）と推定されており、一方の「番号 25」は資料に明治 20 年（1887）と記されている。この年代差にもかかわらずろくろの様式、形態、構造がほとんど変わっていないことに驚かされるが、この微細な黄銅片まで 200 年の時を経て受け継がれた技法であるとは、俄かには信じられない気がするのである。⁽⁹⁾

和田家のもう一つの資料「番号 26」は、資料の概略で述べた通り「番号 25」とはかけ離れた特徴を持っている。支柱が欠落しているとはいえ、台の形が違い過ぎるのである。軸に関しても細かな点では明瞭な相違点があつて、それは主に軸受部と軸頭の形態に特徴的にみられる。「番号 25」は段欠き構造の軸受部が、軸頭の部分で径が太く戻っているが、「番号 26」では軸受部で径が絞られたら、軸頭の部分でそれ以上太くはならずそのまま軸端となる。このスタイルはこの後に見る大萱の資料に共通してみられるものである。（糸魚川にも同タイプが 1 点ある。）また軸端の金輪の形が「番号 25」では径が細く絞られ、逆に金輪の幅が広くなり筒形になる。一方「番号 26」では軸受部の径がそのままの太さで軸端ま

で来て、径が大きく幅の狭い金輪が取り付けられている。さらに爪の取付部の中央に木軸の芯（突起）が残されているのに対して「番号 25」はわずかに山形に残っている程度である。以上細かな差異であるが、これら「番号 26」が持っている特徴はすべて「番号 13～17」の高山市大萱の資料に共通してみられるものである。寒水の和田家所有の二点の資料が、これほど相違する特徴を持っていることについてどう解釈するか、一つの課題である。

では最後に高山市大萱の資料について検討したい。

高山市大萱の小掠家に残る資料は 5 点で、いずれも丹生川村の時に指定文化財になっている。また完全な形のろくろは「番号 13」、「番号 14」、「番号 15」の 3 点で、残る 2 点（「番号 16」、「番号 17」）は軸のみである。

この大萱の小掠家については当主からの聞き取りと村史の記述からおおよその来歴がわかっている。⁽¹⁰⁾ 木地の仕事は祖父の代までやっていたが明治の初年頃は荒城川の上流木地屋溪谷に住んでおり、戸籍法の改正で折敷地の五味原へ出て来たという。その後ダム建設があり平成になって現在の大萱に移ったということであった。折敷地では木地屋は一軒のみで何人か職人を使って木地を挽いていたというから、ろくろの台数が多いことも理解できる。さて、これらの資料が近隣の木地屋の資料とどのような関係にあるのかみてみよう。

細かな点であるが大萱の資料 5 点に共通する特徴が軸頭にある。4 本の爪の付け根のセンターに軸端が突起状に突き出ていることである。ろくろ軸製作の作業痕か、爪の強度を補強するものか、単なる意匠かは不明だが、すべてに共通していることから何らかの意図があるものと考えられる。そして先述したように寒水 B「番号 26」にも同様の突起がある。次に注目したいのは後部軸受への黄銅片の使用である。大萱の「番号 14」「番号 15」に見られたこの技術が明宝「番号 24」、寒水「番号 25」に共通してみられる。また軸頭の形状に関しては、軸受部の段欠き構造は軸径が一旦絞られて軸頭で再び太い径になるのが通例だが、大萱の資料は「番号 15」以外はすべて軸端まで細い径のままで金輪がはめられている。これは機能的に意味があるというものではないかもしれないが、これと同じ形状は明宝の「番号 24」と寒水の「番号 26」にも認められる。逆に大萱の資料にしか認められない特徴は注油孔の蓋の形状で、「番号 14」の四角錐の上を平にした大きな蓋、「番号 15」の丸いつまみ状の蓋は、いずれもユニークで他に例がない。これは意匠的要素の強い特徴と言える。

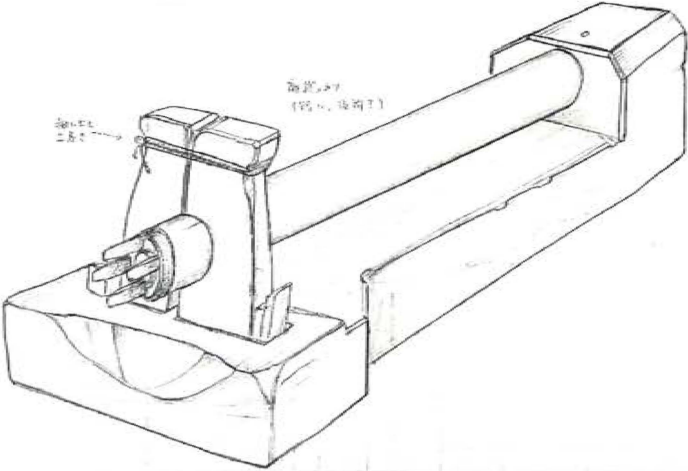
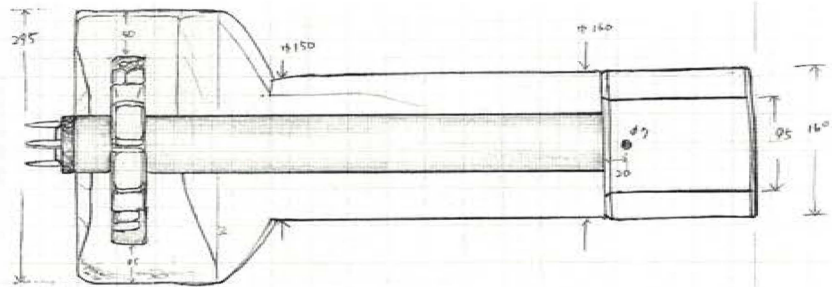
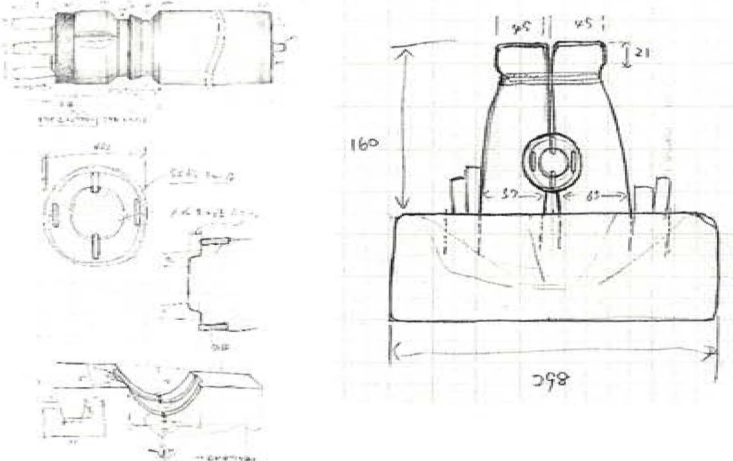
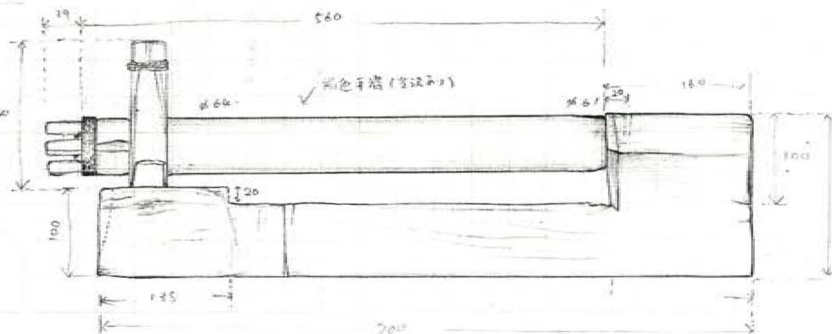
以上岐阜県内 11 点の資料について相互の類似点や相違点等を見てきたが、これらの比較検討を踏まえてそれぞれの関連を見れば、やはり高山市大萱の 5 点と明宝・寒水の 3 点の相関の高さを指摘することが出来るだろう。

第 4 節 愛知県のろくろ

愛知県で木地屋が活動した地域は奥三河といわれる北東部に限られ、この地域は長野県南部と境を接して愛知県では唯一の山地である。行政区分では北設楽郡がそのエリアで、構成町村は設楽町、東栄町、稲武町、津具村、豊根村、富山村の三町三村であった（平成の

| | | | | | |
|--|----------------------------------|-----------------------|----------|--|-----|
| 資料所在地(施設) | | 愛知県北設楽郡設楽町(旧津具村)民俗資料館 | | 地方名 | ろくろ |
| 調査台帳No. | 22 | 原資料No. | 2(9)B-50 |  | |
| 文化財指定等 | 国指定重要有形民俗文化財「津具の山樵用具および加工品」(S39) | | | | |
|  | | | | | |
| | | | | | |
| 〔資料来歴〕 <ul style="list-style-type: none">・採集地 設楽町神田・使用者 原田清三郎・採集年月日 昭和33年2月27日 | | | | 〔基本データ〕 全長865mm、軸長682mm、軸径49mm、重量7.9kg <ul style="list-style-type: none">・前後の木口は鋸の目が残る。それ以外の面は手斧で削って仕上げてある。・支柱はタテ受型、上部の結び目は欠損。・軸は円柱形で後端部にろくろ目あり。軸長682mm、軸径49mm。・台の頭部、支柱が立つ部分はほぼ左右対称。台の後部軸受の手前15cmほどが1段低く削り取られている。・後部軸受に注油孔あり。フタはなし。・支柱手前の付け根3cmほどの所に丸い埋め木の痕あり。(他のろくろでは和釘が打ちこまれているあたり。)・手前支柱の角に深く面を取った箇所あり。さらにその下に、支柱そのものが深い段状になった部分がある。他には見られない特徴。・爪は4本 平行型。鉄輪あり。・軸受は中段型、しかし段はわずかで溝も浅い。軸受部の半円弧の中央には、わずかな切れ込みがある。・後部軸受の芯はテーパのついた鉄芯で銀色に光る。軸受穴の内側にも鉄がはめ込まれて金属色に赤さびが混じっている。 | |
| 〔保存状態〕 <ul style="list-style-type: none">・一見して、かなり古い資料と思われる。台の下部の木質が劣化腐敗してガサガサになっている。台(栗材)の下部には虫食いの穴も多数ある。・軸の保存状態はよい。 | | | | | |

| | | | |
|---|----------------------------------|-----------------------|----------|
| 資料所在地(施設) | | 愛知県北設楽郡設楽町(旧津具村)民俗資料館 | |
| 調査台帳No. | 23 | 原資料No. | 2(9)B-51 |
| 文化財指定等 | 国指定重要有形民俗文化財「津具の山樵用具および加工品」(S39) | | |
| <div></div> | | | |
| <div><div><p>〔資料来歴〕</p><p>採集地 設楽町神田</p><p>使用者 原田清三郎</p><p>採集年月日 昭和33年6月27日</p></div><div><p>〔保存状態〕</p><p>木質の劣化少なく良好な保存状態</p><p>虫害等なし 重く堅牢な材質(栗材)</p></div></div> | | | |
| <div><p>〔観察記録〕</p><ul style="list-style-type: none">・軸長560mm、軸径64mmで太めである。・軸の表面は平滑で褐色の光沢あり、ろくろ目は見られない。・爪の長さ39mmに対して、爪と爪の開きが56mmと大きく爪自体の幅も広い。・軸先端、爪の取り付け基部に、径36mm高さ7mmの円盤状突起あり。・支柱はタテ受け型。手前支柱の角に切れ込みなし。・台は頭部が大きく、光沢のある堅い材質(栗材)。全体にくっきりとした木目が目立つ。・台は支柱の後ろから後部軸受まで一段低く削り取られている。・台前部の上の縁が中央部を半円状に削り取られている。(大物加工対策か)・軸受部は「中段型」(中段が軸後部方向に傾斜している)・後部軸受の上面が台形に大きく面取りされている。・後部軸受の注油孔にはふたがなく、ふた用の四角い掘り下げもない。<p>〔基本データ〕 全長700mm、軸長560mm、軸径64mm、9.7kg</p></div> | | | |

| | | | | | |
|---|----|------------------------|---|-----|------|
| 台帳番号 | 23 | 愛知県設楽町(津具) [津具民俗資料館 蔵] | 地方名 | ろくろ | B-51 |
| <p>【見取り図】</p>  | | | <p>【平面図】</p>  | | |
| <p>【正面図】 (部分図・説明図)</p>  | | | <p>【側面図】</p>  | | |

合併前)。中でも津具村は木地屋が多く集まり古くから活動していた地域として知られる。『山村の生活と用具—愛知県・津具村—』によれば蛭谷の氏子駄帳では享保3年(1718)に23戸の木地屋が記録されているが、来住は更に古く、遡れば中世後期における筒井氏来住が北設楽郡へ入った木地屋の最初であろうとしている。⁽¹¹⁾

(1) 設楽町のろくろ

11) ろくろ (津具歴史民俗資料館 No.2 (9) B-50) (調査台帳番号 22)

本資料は愛知県北設楽郡旧津具村(現設楽町)において「津具の山樵用具及び加工品」として国の重要有形民俗文化財に指定(1964)されたろくろ二点の内の一点である。旧所有者は原田清三郎という木地屋であった。⁽¹²⁾

基本構造はタテ受型で対称T字部のトンボ型、台長 865 mm、軸長 682 mmの中型ろくろである。軸は直通で径 49 mm、軸頭がわずかにふくらんで4本平行型の爪を持つ。軸受部は段欠き構造だが、中央にツバを持つタイプで、支柱側の軸受半円弧もそれに対応した細工がある。半円弧中央にはわずかな切込みがある。正面から見て右側の支柱に特徴的な細工が施されている。それはろくろ鉋を器の底面に当てるときの受けになるものと考えられるが、支柱の中ほどに明瞭な段が設けられている。わずかな凹みや切込みが認められる例は多いが、このようにはっきりとした段差を付けてあるのは珍しい。

12) ろくろ (津具歴史民俗資料館 No.2 (9) B-51) (調査台帳番号 23)

指定文化財のろくろ二点の内のもう一点であり、旧所有者は同一である。基本構造は変わらないがこちらは台長 700 mm、軸長 560 mmで一回り小さい。ただ軸径は 61~64 mmと太く、軸頭もほぼ同じ太さで幅広で頑丈な爪が4本平行型で埋め込まれている。台の前方のT字部もどっしりと大きく作られている。軸受部にはもう一点のろくろと同様の中ツバが付いた段欠き型軸受となっている。軸が太く、爪の開きも 56 mmと広いことから盆や鉢など径の大きな器を作るためのろくろと思われる。後部軸受には蓋のない単純な注油孔があり、後部軸受の穴の内壁には銅片が張っており緑青が付着している。

(2) 愛知県の木地屋について

北設楽郡一帯が古くから木地屋の活動した地域であることは先に述べた通りだが、その歴史的な流れと併せて興味深いエピソードを紹介しておきたい。

まず歴史については『山村の生活と民具』に郡内の木地屋を概括した周到な表が作成されている。⁽¹³⁾ 18世紀以降の氏子狩のデータをもとに町村別、年代別に木地屋戸数を集計したもので、この地域の活動の変遷を読み取ることが出来る。延戸数が多いのは豊根、稲武、設楽、津具でいずれも 110~150 戸ほどとなっており、東栄、富山は 50 戸程度である(郡全体で約 650 戸)。また年代別では半世紀区分で 18 世紀前半から 19 世紀前半まではほぼ横ばいの 170~180 戸ほどが常に活動しており、最盛期は 19 世紀前半の 188 戸であった。それが

19 世紀後半では半数にまで落ち込んで、衰退の背景として業界の不況、原木の枯渇、天保の飢饉を挙げている。⁽¹⁴⁾ また同集計表で注目したのは木地屋戸数の内訳として氏子狩の二系統、すなわち蛭谷系と君ヶ畑系の系統別戸数を集計していることである。それによればこの地域では君ヶ畑系が多かったことがわかる。簡単な表で示せば次のようになる。

| | 富山村 | 豊根村 | 津具村 | 設楽町 | 東栄町 | 稲武町 | 北設楽郡 |
|------|-----|-----|-----|-----|-----|-----|------|
| 蛭谷系 | 27 | 49 | 87 | 38 | 15 | 32 | 228 |
| 君ヶ畑系 | 23 | 103 | 25 | 103 | 42 | 108 | 427 |

氏子狩制度と二派の対立については第2章で述べたので省略するが、江戸後期にここを舞台に起こった大事件は、こうした分布状況が背景にあったことは否定できないだろう。この事件は信州根羽村と三州津具村を舞台に、支配権をめぐる謀略を背景に多くの村人を巻き込んで暴力沙汰となったもので、俗に江戸公事とか白川一件と言われるものである。文化元年（1804）の事件勃発から文化四年（1807）の江戸寺社奉行所の裁許状が下るまで3年を要して一件落着となった。⁽¹⁵⁾

（3）岐阜県（美濃・飛騨）と愛知県（奥三河）のろくろの比較

地理的に近接していることから両地域の資料の特徴について相関関係の有無を検討してみた。基本構造においてはほとんど変わるところがなく、飛騨、美濃、奥三河ともにタテ受型、対称T字形のトンボ型、直通の軸を持ち爪は4本平行型である。では奥三河の2点の資料の最も特徴的なところは何か、それは分解しなければ見えない部分にあった。2点とも共通して軸受部の段欠きにツバがあり（中ツバ型）、美濃の4点「番号24」～「番号27」には1点もその特徴は見られなかった。飛騨で中ツバ型は飛騨市の「番号12」と高山市大萱の「番号15」のみである。このタイプが全国的にも極めて珍しく、それも中部地方に限られていることは後段で論じたいと思うが、とりあえず奥三河の資料と飛騨の資料にそうした数少ない特徴が共通して見られたことを確認しておきたい。

第5節 滋賀県のろくろ

滋賀県は言うまでもなく近世における木地屋支配の根源地である蛭谷と君ヶ畑の所在する県で、木地屋の歴史的背景については他の地域とはまったく別の意味で古く濃密な足跡をとどめている。それは単に惟喬親王伝説や氏子狩支配に限るものではなく、東大寺造営の杣としての役割を担った歴史や、大陸渡来の秦氏が依拠したとされる特異な伝承まで含めての話である。ただ実際の木地業を営んだ歴史はあまりに古く、また諸国に散在する木地屋の初発地であることから近代まで稼業した木地屋集落の存在は限定的である。その中でよく知られているのは朽木村（現高島市）の麻生木地山と貫井村（葛川村を経て現大津市）の木地屋で、いずれも木地屋根源地小椋郷の対岸、湖西地方にあることが興味深い。このうち滋賀県で唯一の資料となる貴重な手引ろくろは朽木村麻生木地山で見つかった。⁽¹⁶⁾

(1) 滋賀県高島市朽木木地山のろくろ

13) 手挽きろくろ (朽木資料館 県指定文化財 28-9) (調査台帳番号 45)

台長 980 mm、軸長 738 mm、軸径 66~70 mmで基本構造はタテ受け型、爪は4本平行型の大型のろくろである。このろくろで最も注目される特徴は台形がバチ型であることで、東北以外では極めて珍しい形である。さらに後部軸受の形も特色があり、途中まで立ち上がりがあるものの上面がかまぼこ型に丸みが付いていること、上から見ても(平面図)台後部が不整形ながら丸く面を取ってあることがわかる。前部支柱は左右で幅も高さも異なり、爪に向かって左側の支柱の幅が広く高さもある。またこの支柱は上部を結える紐がなく、よく見ると欠落しているのではなく当初から使った形跡が見られず、紐で結わせるためのくびれ(段差或いは切込み)もまったくない。これは極めて珍しいことである。台前端の木口は軸の下が削り取られており、径の大きな器への対応と思われる。軸受部はシンプルな段欠き型で、軸頭は本体の軸より径が細く、特別の意匠的要素は見られない。

(2) 朽木木地山のろくろとその歴史背景

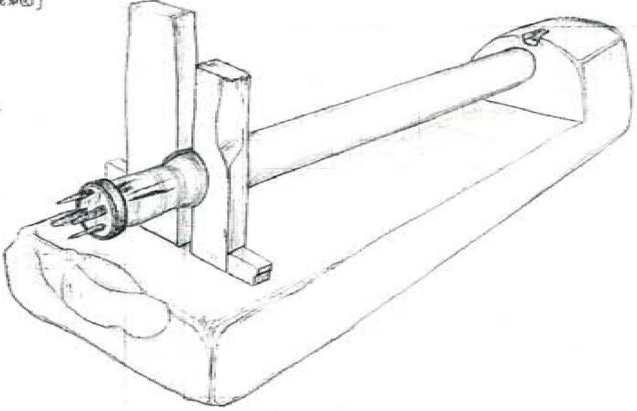
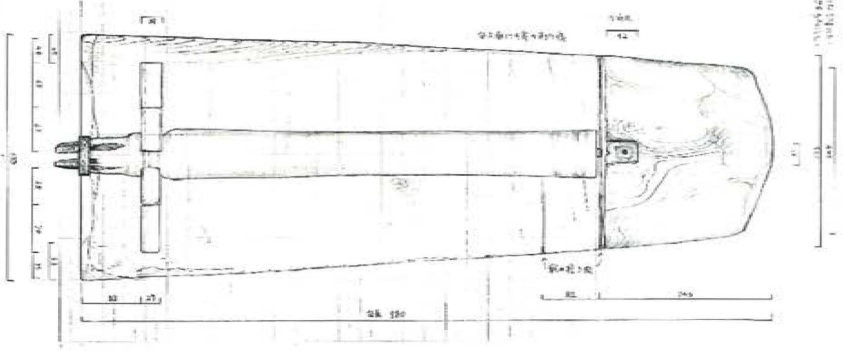
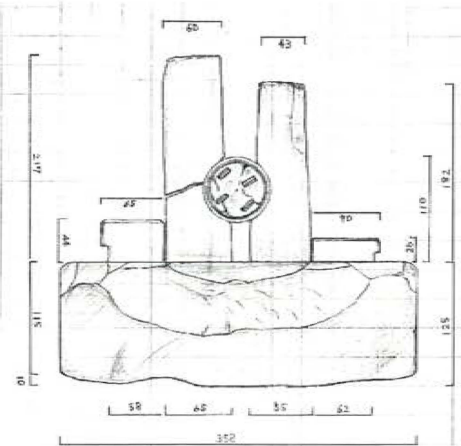
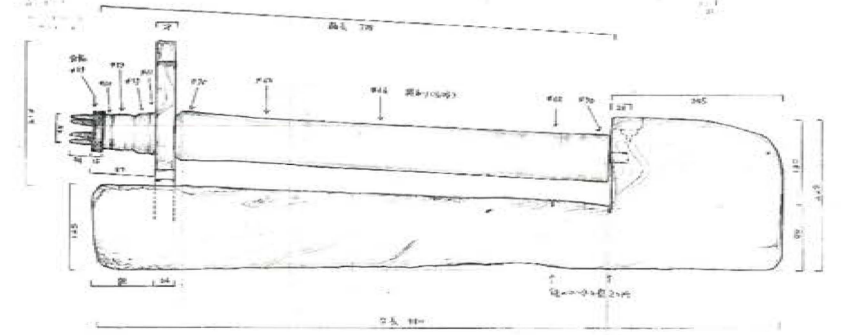
先に述べたように滋賀県で唯一確認されている手引きろくろであり、木地屋の歴史にとって特別の意味と役割を担ってきたこの地域の資料が残されていたことの意味は大きい。

朽木の挽物は古くから知られており、橋本鉄男は『朽木村志』でいくつかの文献を挙げてその歴史を述べている。古いものでは『毛吹草』(江戸時代の俳諧作法書、正保二年(1645)刊)に諸国物産として「朽木の塗り物 盆鉢五器等」として紹介されているという。⁽¹⁷⁾

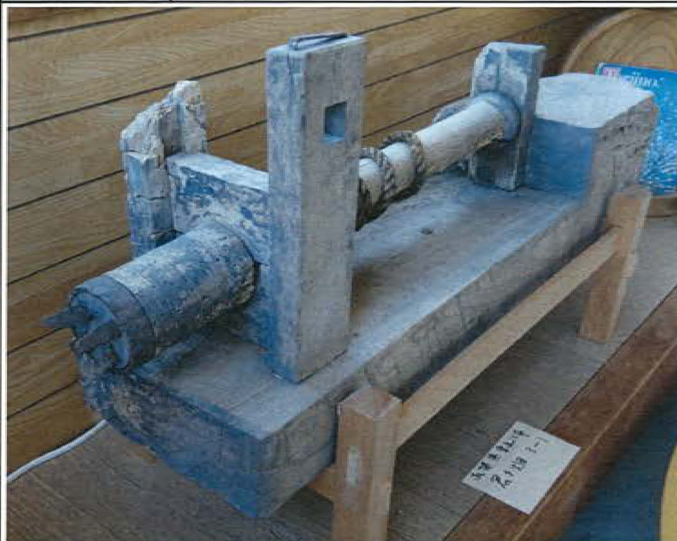
朽木の塗り物で広く知られるのは16弁の菊花をデザインした丸盆である。皇統の系譜を引くという木地屋の思いが形となったと言われているが、簡素で使い勝手がよかったことから広く使われたようである。

さて朽木木地山は、木地屋の歴史でもう一つ特筆すべき位置を占めていた。それは蛭谷の寺社役人が氏子狩に出かけるときに最初に訪問する木地屋であったということで、これを帳初めの儀という。いくつかの例外はあるものの基本は常に朽木の木地屋が全国巡廻の最初の訪問地であり、最後の帳仕舞いは京木地屋であった。朽木木地屋のこの地位の由来は言うまでもなく小椋郷からの全国最初の分派であったということにある。そしてこの地位は蛭谷の氏子狩においてのみ見られることで、⁽¹⁸⁾氏子狩システムの創始者大岩助左衛門の発案であった。試みに蛭谷氏子駈帳第一号簿冊(正保4年・1647)を見れば「麻生村」⁽¹⁹⁾の見出しの下に45人の戸主名が並んでおり、一般的な山住みの木地屋集落としては大変な規模であったことがわかる。この木地山の集落規模の推移を氏子狩の巡廻年度ごとに拾い出した表が『村志』に掲げられているので参照すれば、江戸前期はほぼ50戸前後で推移し、前期末の延宝7年(1679・第5号簿冊)以降は20数戸に減少し、江戸末期の弘化3年(1846・第23号簿冊)では9戸と激減しているのがわかる。明治以降も衰退傾向が続き、昭和7年の民俗調査では一軒、昭和32年の国による木地屋の習俗調査ではまったく廃絶していた、と『村志』は記している。

| | | | |
|--|------------------------|--|--------|
| 資料所在地(施設) | 滋賀県高島市朽木野尻478-22 朽木資料館 | 地方名 | テビキロクロ |
| 調査台帳番号 | No.45 木地山 |  | |
| 文化財指定等 | 県指定文化財 28-9 | | |
|  | |  | |
| <p>＜資料来歴等＞</p> <p>〔地方名〕 テビキロクロ</p> <p>〔採集地〕 旧朽木村 木地山</p> <p>〔製作地〕 不詳 〔使用地〕旧朽木村 木地山</p> <p>〔来歴〕 昭和32年(1957)朽木村木地山の山崎象一家で橋本鉄男氏が発見。朽木村の木地山は朽木盆の製作地として有名な木地屋集落であり、山崎家はその木地屋の系統であった。</p> <p>* 2本の支柱が左右入れ替わっていた話</p> <p>作図のために観察していたところ、短い支柱の内側に鉋を固定するための削り痕があった。これは本来ろくろの爪側(外側)になければならないもの。このことから支柱の左右が入れ変わったと推測。橋本氏の「ろくろ」p320掲載の写真によってこのことが確認された。なぜかp346の図面では入れ替わっている。</p> <p>〔保存状態〕 長く放置されていたものと思われるが、木質の劣化や腐敗などなく、良好な状態である。台はクルミ材、軸はミネバリ。</p> | | <p>基本データ＝全長980mm 軸長738mm 軸径68mm 重量24kg</p> <p>＜観察記録＞</p> <p>〔形式〕タテ受型ろくろ。支柱の長さや幅が左右で異なる。くさびは後補。</p> <p>〔支柱・軸受〕支柱上部の結え紐なし。支柱にくびれ等なく当初から結ばない方式か。両支柱内側にのみ小さな穴が向き合って開けられているが、用途不明。軸受は単純な段欠きで、半円弧に分割の切込みなし。</p> <p>〔軸〕円柱型で全体に平滑でつやあり、ろくろ目なし。径66mm両端のみ70mm。</p> <p>〔爪・軸頭〕爪は4本平行型、短く幅広の爪が45mmの開き幅で付いている。軸頭は特別の意匠なく軸径より少し細い円柱型。(細かいひび割れあり)</p> <p>〔後部軸受〕本体と一体の軸受で、かまぼこ型で背面も丸いのが特徴。軸受上部に注油孔あり。四角い孔を深めに掘った底に更に小さな角穴があり、その底に注油の丸い穴あり。ふたなし。</p> <p>後部軸端には径12mm(先端11.5mm)、長さ28mmの鉄芯あり。</p> <p>〔台〕形状はパチ型。前端の木口上部を手斧で三日月型にえぐってある。大きめの器を作る時への対応と思われる。</p> | |

| | | | | | |
|--|----|---------------------|---|--------|-------------|
| 台帳番号 | 45 | 滋賀県高島市(朽木)〔朽木資料館 蔵〕 | 地方名 | 手挽きろくろ | 県指定文化財 28-9 |
| <p>〔見取り図〕</p> <p>〔見取図〕</p>  | | | <p>〔平面図〕</p>  | | |
| <p>〔正面図〕 (説明図)</p>  | | | <p>〔側面図〕</p>  | | |

| | | | |
|-----------|-------------------------|---------|--|
| 資料所在地(施設) | 滋賀県東近江市永源寺町 君ヶ畑 (自治会)所蔵 | | |
| 調査台帳番号 | No.44 | 君ヶ畑 3-1 | |
| 文化財指定等 | | | |



<資料来歴等>

〔地方名〕 手引ろくろ

〔採集地〕 伝 三重県由来

〔製作地〕 不詳

〔使用地〕

〔来歴〕

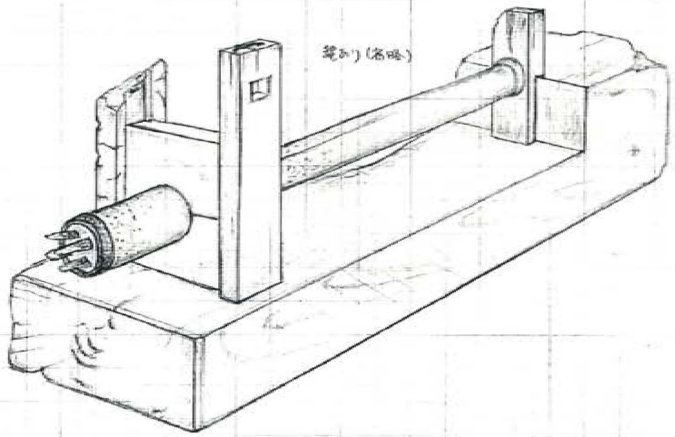
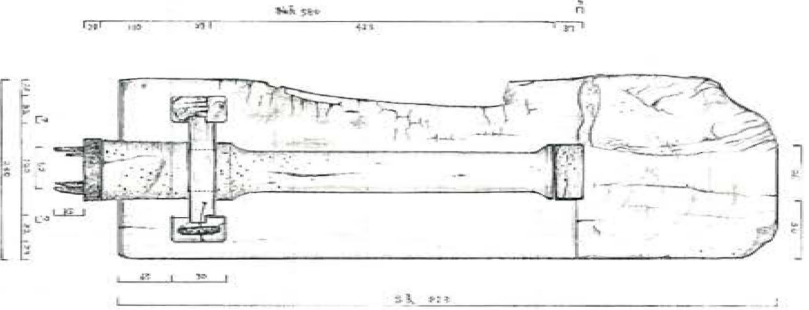
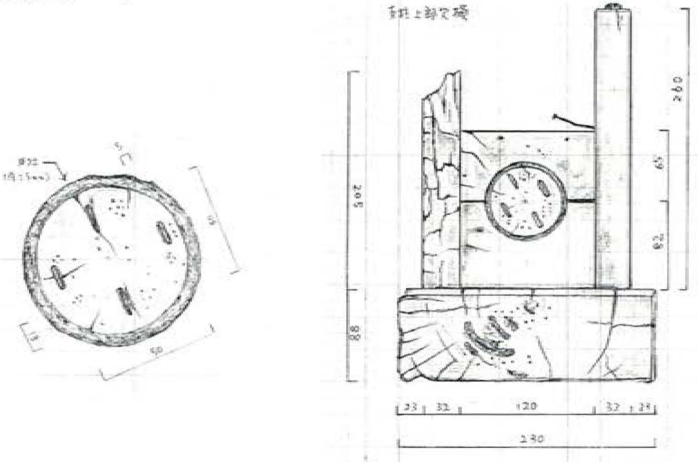
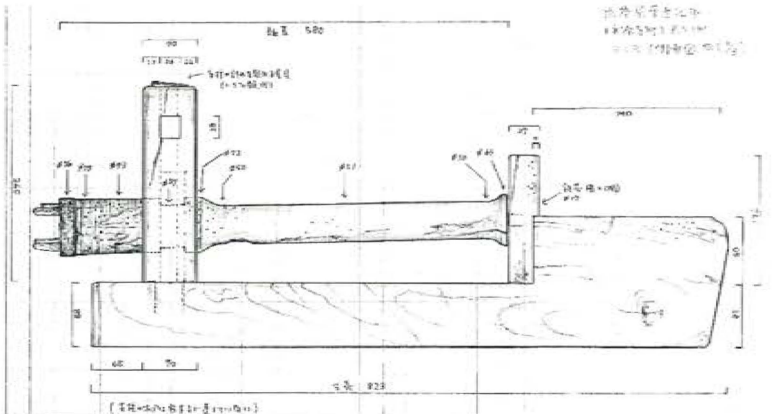
はっきりしたことはわからないが三、四十年前に三重県から寄贈されたとの話あり。君ヶ畑自治会が所有しており、村の中心のバス停留所に併設されたミニ展示館のケースに展示されている。

〔保存状態〕 おそらく当初の保管環境のためと思われるが、片側半分が極端に劣化し、破損が著しい。もう片面は原形をとどめており、木質の傷みも少ない。

<観察記録>

〔特徴〕

- ・ヨコ受型ろくろ。片側が著しく劣化して、前部支柱は一方の上部が欠損。
- ・支柱には軸受として横棧が上下二枚、さらに支柱上部にほぞ穴があるが、差し込まれていたと思われる横棒は欠損。支柱は台を貫通していない。
- ・軸の形は中細型で、軸長580mm。軸受は段欠き型。
- ・軸頭はツバの部分と同じ太さでシンプルな円柱。粗いろくろ目が残る。
- ・爪は4本平行型、短く幅広の爪が約50mmの開きで埋め込まれている。
- ・台の形状は長方形で、側面に手斧削りの跡が残るケヤキ材である。
- ・後部軸受は珍しい二木型で、注油孔がない代わりに軸受の表面に浅い溝が刻まれ、後部鉄芯の上に達している。ここに油を垂らしたのか。
- ・前部軸受を構成するヨコ板には注油孔なし。

| | | | | | |
|---|----|-------------------------|---|--------|--|
| 台帳番号 | 44 | 滋賀県東近江市(伝三重県)〔君ヶ畑自治会 蔵〕 | 地方名 | 手引きろくろ | |
| <p>〔見取り図〕</p>  | | | <p>〔平面図〕</p>  | | |
| <p>〔正面図〕 (部分図)</p>  | | | <p>〔側面図〕</p>  | | |

さて、以上を踏まえて朽木木地山のろくろに話を戻して検討してみたい。朽木の資料と周辺（中国山地、美濃、飛騨）の資料を比較してみると、この朽木のろくろが示している特徴はどこにも見当たらないのである。木地屋の根源地・近江の国の資料であれば、当然そのろくろは一つの祖型を示していると考えてもおかしくないはずで、逆にその周辺には同系のろくろが存在しなければならないはずだ。しかし、事実は全く異なっていた。もちろんタテ受型の支柱、4本平行型の爪、円柱型のシンプルな軸、台と一木式の後部軸受、これらの基本構造はこれまで見て来た中部、北陸と変わらないが、台形があまりにもかけ離れているのである。データ比較一覧表（p57 挿入「Ⅱ-図 2」）を見れば、同じバチ型に分類されるのは東北の浄法寺「台帳番号 28」～「同 31」があり、比較的近くでは石川県真砂「台帳番号 39」があるのみで、他はほとんどすべてT字形の前部を持つトンボ型に分類される⁽²⁰⁾。ただし、浄法寺の資料が似ているのは台形のみで、支柱構造がまったく違う別系統のろくろであることは東北地方のろくろの節で詳述したとおりである。注目したいのは地理的に近く、同じタテ受構造の支柱を持つ石川県真砂の方である。

滋賀県で確認された資料が 1 点のみであることが残念であるが、もし複数点の資料があればもう少し究明の糸口が見つかるかもしれない。いずれにしても、根源地と言われる近江のろくろが周辺のろくろと形態的に孤立しているということはそれ自体一つの問題であり、今後も検討されねばならない課題である。⁽²¹⁾

第3章-第1節~第5節〔注〕

(1) 橋本鉄男は『朽木村志』（1974 朽木村教育委員会）の中で近江国を源とする 2 つの大きな木地屋の流れとして梶木地（^{きみがはた}皇ガ畑系）と杓子木地（^{おじがはた}大君ヶ畑系）を位置づけ、その後の勢力図の変遷の中で杓子木地系統は近江の小椋郷を離れて伊勢、大和、紀伊方面へ流れていった、という考えを示している。これらの地域に今も杓子木地が多いのは、こうした事情と関連があるのではないかとしている。（同書 p214）

(2) 大子町 1984『大子町史 資料編 上巻』p592

「天保 12 年 木地塗師許可願」添付文書に大蔵家の先祖の名が記され、会津から大子町への来住の経過がわかる。なお同家の詳細な家系や下伊那からの移住の経過については会津在住の木地屋研究家金井晃氏の教示を受けた。

(3) 八重河内村（やえごうちむら）＝遠山村、南信濃町を経て平成 17 年に飯田市に編入された下伊那地方の村。

(4) 山梨県北都留郡小菅村 2009『小菅村文化再生研究室調査報告書-小菅村の木地屋』

(5) 本資料の写真と思われる図像（「昔の手まわしロクロ」）が『きよみ風土記』1986 清見村育委員会編の p98 に掲載されている。

(6) 清見村誌編集室 1976『清見村誌 下巻』p622

(7) 古川町教育委員会 1992『木地師の世界』p10 「入山状況一覧表」より

- (8)話者・広瀬基一氏（大正13年生まれ）は若いころ坂内村役場に勤めていて、木地屋の戸籍を滋賀県の蛭谷から坂内村に移す仕事に関わったという。また妻が別の小掠家から来ていることもあり、付き合いがあつてろくろを預かることになったとのこと。
- (9)後部軸受にメタルとして黄銅片を使う技法は地域的な偏りがあり、技術の系譜を追う上で一つの手掛かりになると思われるので後段で検討したい。
- (10)丹生川村 1998『丹生川村史 民俗編』p165
- (11)（財）国土地理協会 1981『民俗資料選集9山村の生活と用具―愛知県・津具村―』p45
- (12)指定文化財の母体は津具村の郷土史家夏目一平の個人コレクションで、大正初期から始められた収集の範囲は郡内、近県に及び範囲が広い。本資料は旧設楽町神田で収集。
- (13)（財）国土地理協会 1981『民俗資料選集9山村の生活と用具―愛知県・津具村―』p46
- (14)前掲書には飢饉で落命した木地屋の話として稲武町大字稲橋瑞龍寺過去帳の木地を紹介している。天保3年（1832）の頃に数名の木地師戒名とともに「此歳段戸山木地師多餓死可憐」と記されている、というのである。（この歳、段戸山の木地師多く餓死す、憐れむべし。）土地を持たず、自ら作物を作らなかった木地屋にとって飢饉はまさに命取りであつて、全国でこうした悲惨な事例が夥しい数に上ったであろうことは想像に難くない。（段戸山は設楽町の山）
- (15)この事件の顛末については橋本鉄男 1979『ろくろ』法政大学出版局 p233～253 に詳しい。
- (16)（調査台帳番号 45）のろくろは昭和32年（1957）に橋本鉄男が朽木村大字木地山の調査に訪れ、同地の木地屋山崎象一家で発見したもの。発見当時は縁の下に埋まるようにして放置されていたという。自著『ろくろ』（1979 法政大学出版局）に実測図とともに発見当時の様子を書いている。（p346、347）
- (17)朽木村教育委員会 1974『朽木村志』編者橋本鉄男 p203 いくつかの文献に出ている朽木の挽物についてそれぞれ紹介しているが、本論では最も年代の古いものとして『毛吹草』の紹介を引用した。
- *本書の編集（主文総括）を引き受けた経緯があとがきに詳しく記されているが、当時橋本は朽木東小学校の教職にあつたという。本書が出版された5年後に橋本の主著ともいふべき『ろくろ』が上梓されており、村史編集においても木地屋に対する関心は強かったことと推測する。まして縁浅からざる朽木に関してはなおのことであつただろう。そうした様子が同書の「二 麻生木地山の木地屋たち」に窺える。
- (18) このように朽木木地山と蛭谷は氏子狩開始当時から密接な関係があつたことを考えれば当然とも言えるが、後発の君ヶ畑の氏子狩では一度も朽木木地山を訪れていない。
- (19)「朽木村大字麻生の木地山」が本来の意味だと思うが「朽木木地屋」「麻生山木地屋」「麻生木地山」等々様ざまな表記があり、どれも同じ一つの集落を指している。
- (20)福島県南会津町の「台帳番号 18」も分類はバチ型であるが、この資料は軸以外が複製であり、その元となる情報が確認できていないことから含めなかった。
- (21)もとより根源地の蛭谷、君ヶ畑には伝世されたろくろは存在しない。ここでろくろが使われた時代は恐らく中世の昔であり、しかもそれを使った木地屋たちは諸国に散った訳

であり、残されたのは管理部門としての寺社であったからである。現在蛭谷、君ガ畑が所蔵・展示しているろくろは後世の寄贈品である。足踏ろくろは別として手引ろくろでは、蛭谷は秋田県雄勝郡皆瀬村の資料を、君ガ畑では三重県からと伝えられる資料をそれぞれ展示している。

第4章 中国地方のろくろとその歴史的背景

中国地方において確認できたろくろは10点で、内訳は岡山県が9点、鳥取県が1点と岡山県がほとんどである。島根県、広島県、山口県は未調査であるから中国地方全体の傾向を示すものではないが、間違いなく岡山県は近世初頭から木地屋の一大集積地であった。調査した手引ろくろの概要は以下の通りである。

(単位mm、kg)

| 台帳番号 | 県 | 採取地(旧地名) | 形式 | 全長 | 軸長 | 軸径 | 重量 |
|------|-----|-----------|------|------|-----|----|----|
| 34 | 岡山県 | 旧湯原町田羽根 1 | タテ受型 | 1190 | 855 | 73 | |
| 35 | 〃 | 旧湯原町田羽根 2 | タテ受型 | 1095 | 843 | 75 | |
| 36 | 〃 | 旧湯原町田羽根 3 | タテ受型 | 1100 | 698 | 70 | |
| 37 | 〃 | 旧湯原町田羽根 4 | タテ受型 | 1370 | 945 | 70 | 23 |
| 46 | 〃 | 旧上斎原村赤和瀬Ⅰ | タテ受型 | 910 | 665 | 62 | 14 |
| 47 | 〃 | 旧上斎原村赤和瀬Ⅱ | タテ受型 | 925 | 695 | 71 | 16 |
| 48 | 〃 | 旧上斎原村赤和瀬Ⅲ | タテ受型 | 920 | 675 | 49 | 9 |
| 49 | 〃 | 旧奥津町羽出 | タテ受型 | 1020 | 848 | 74 | 17 |
| 50 | 〃 | 旧勝田町右手 | タテ受型 | 1015 | 795 | 80 | |
| 52 | 鳥取県 | 三朝町栗祖 | タテ受型 | 1245 | 968 | 70 | 20 |

*合併後の市町村名は、真庭市(湯原町)、鏡野町(上斎原村、奥津町)、美作市(勝田町)

第1節 岡山県のろくろ

旧国名の美作は岡山県の北部、鳥取県境近くの中国山地の一角を占め古くから多くの木地屋が活動していた地域である。調査した県内のろくろはすべてがこのエリアで使われていたものである。以下にそれぞれの地域ごとに資料の概要と歴史的背景について述べる。

1 旧湯原町田羽根(現真庭市)

(1) 田羽根のろくろの概要(岡山県立博物館蔵 1~4)

1) ニニンビキロクロ・田羽根-1(資料No.319)(調査台帳番号34)

全体に黒く煤けているが保存状態はよく、どっしりとした大型のろくろである。基本構造はタテ受型で径78mmと太めの直通の軸を持つ。特徴は何といてもその大きさである。軸

の長さ 1190 mm、台の厚み 145 mm で重量は計測できなかったが 20 kg はあると思われる。形態的な特徴として、台前方の T 字部が長く、台長の三分の一以上あること、同じく後部軸受の長さも際立っている。また細部についてみれば、二本の支柱上部をワラ縄で三回巻いて結えているが、その結えるためのくびれが深く削り込まれており、結果として頭部は釘の頭のようにツバの出た形となっている。軸頭は全体の大きさ、軸の太さに比べて小ぶりの作りで、ほとんど装飾的要素はなく、小さな金輪の中にやはり短めの 4 本平行型の爪が付いている。大型ろくろの外形の割りにはお椀などの小物を加工していたのであろうか。なお後部軸端にも金輪がはめられているのは軸全体にひび割れが貫通していることから補強のために付けたもので、様式化したものではない。造形的に無駄がなく細部にわたって丁寧な作りが印象的である。

2) ニニンビキロクロ・田羽根-2 (資料 No.330) (調査台帳番号 35)

田羽根-1 とほとんど似た構造、特徴を持つ。ただ T 字部の長さ、後部軸受の長さが 1) と比べて短いので、全体の印象が異なる。軸は 75 mm と太く直通でヒビ割れがないので後部軸端の金輪はない。爪は 4 本平行型で長さ 42 mm、太くてがっしりした爪である。

3) ニニンビキロクロ・田羽根-3 (資料 No.331) (調査台帳番号 36)

田羽根-1、2 と同様大型でどっしりとした作りで重量感のあるろくろだが、細かな点で前二つと異なる特徴がみられる。台前方の T 字部の大きさがさらに肥大化して全長のほぼ半分に近いこと、また台の胴部の幅が細く、平面図で見ると軸の径とほとんど変わらないほどであること、後部軸受には田羽根-1、2 にみられた大きな面取りがなく、変わって注油孔が設けられボタン型の蓋が付いていること等である。支柱上部の縄で結わせる切込みは浅く簡単な造作になっている点も相違点と言える。軸頭は小さなネギ坊主型となり、40 mm のがっしりとした 4 本平行型の爪が付いている。

4) ニニンビキロクロ・田羽根-4 (資料 No.332) (調査台帳番号 37)

本資料は田羽根-3 の特徴を受け継ぎさらにそれを徹底させた感がある。すなわち T 字部の大きさが全長の三分の一を超え、台の胴幅は 10 cm 足らずの細さ、後部軸受がその幅で高さが 255 cm あるので一層スリムな印象となる。さらに大きさが 4 点の中で最長の 1370 mm もある。これは全国的にみても調査済資料 60 余点の中で最長となる。大きさと言ひ、全体のバランスを無視した各部の肥大化と言ひ、極めて個性的なろくろが、どのような要請によって生まれたのか興味深い。

(2) 田羽根木地屋の歴史

先述したように岡山県北部は鳥取県と接する中国山地の一角で森林資源に恵まれ古くから木地屋が入り込んでいた地域である。蛭谷の氏子駈帳では正保 4 年 (1647) の第一号簿冊からこの地域の多くの集落が名前を出している。田羽根もそれらの一つとして記されるがこの頃は戸数 3 戸で決して多くはない。しかし周辺には赤和瀬、湯船、郷原、羽出、阿波、

| | | | |
|-----------|---------|-------|-------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県立博物館 | | |
| 調査台帳No. | 34 | 田羽根-1 | NO. 319 (分類 29-B) |
| 文化財指定等 | なし | | |



〔資料来歴〕

地方名 ニニンピキロクロ(二人引きろくろ)
 採集地 岡山県真庭市湯原町田羽根
 所有者 小椋 博
 採集年 昭和 年 月

〔移住史〕

博家は田羽根町の奥、隠谷(カクシダニ)にあって屋号を本屋という木地屋の家系。博氏はすでに故人となられたが家は現在も残る。先祖は治右衛門といい当地に移住して来た当初からの古い家柄で、津山藩に献上したお椀等が残っている。分家筋の話では木地専門で塗りはやっていなかったという。

(以上、浜子尊行氏による)

〔保存状態〕

良好な保存状態で、木質の劣化はほとんど見られない。
 全体に黒褐色で木肌はきれいな状態。爪、金輪など鉄部分にはかなりの錆。

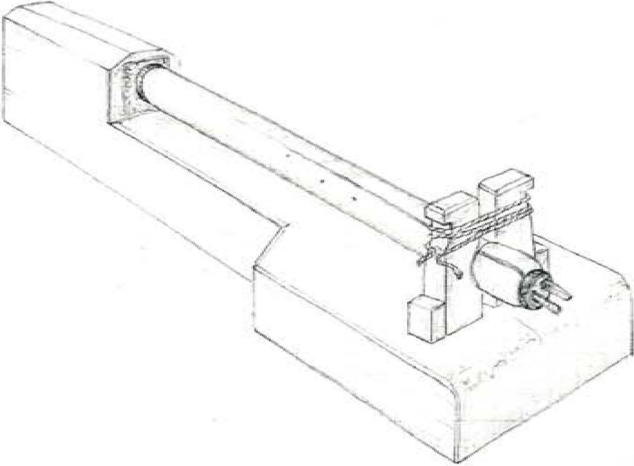
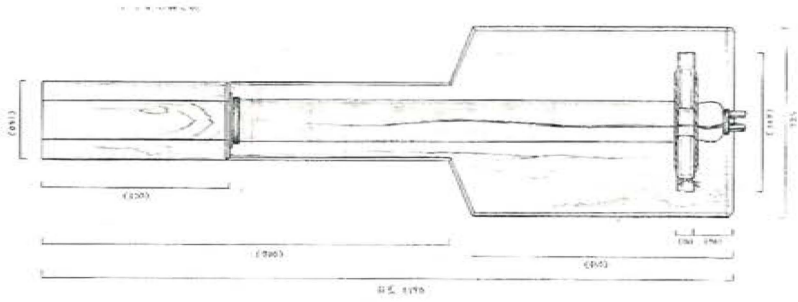
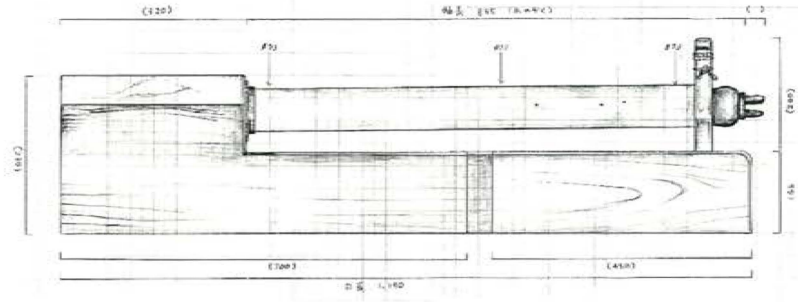


〔観察記録〕

基本データ = 全長1190mm、軸長855mm、軸径73mm、重量未計測

NO.330、331と同系統の形態で、どっしりとした重量感のある大型ろくろ。
 <支柱・軸受> タテ受け型、支柱上部をワラ縄で3巻きほど縛ってある。支柱頭部の形に特徴があり、ひもで縛る部分が大きくくびれ、頭部の側面がツバ状となる。後部軸受部に注油孔がない。

<軸> 4本平行型の爪ががっしりと短めである。軸は直通で径73ミリ。軸受は簡単な段欠き型で段は浅い。これはNO.330、331と共通の特徴。軸頭からヒビ割れが後部まで走っている。後部軸端に金輪あり。ヒビ割れ対策か。
 <台> 厚み、長さともにあって、どっしりとした感じ。台の前部、上辺が丸く面取りされている(NO.330と似る)。他の辺はわずかな面取りで直線的な処理。T字部分は左右対称で、NO.331、332と同様大きめである。(全体の1/3超) T字の付け根の切込みは角度が強く、直角に近い印象。後部軸受部に四角い鉄板が打ち付けられている。この中央に軸端からの鉄芯を差し込む穴が開けられているものと思われる(未確認)。補強のためか。

| | | | | | |
|--|----|---------------------|---|---------|-----------------|
| 台帳番号 | 34 | 岡山県真庭郡田羽根 [岡山県立博物館] | 現地名 | ニンビキロクロ | 田羽根-1(資料No.319) |
| <p>[見取図]</p>  | | | <p>[平面図]</p>  | | |
| <p>[正面図] なし (収納状況により作図不能)</p> | | | <p>[側面図]</p>  | | |

| | | | |
|-----------|---------|-------|-------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県立博物館 | | |
| 調査台帳No. | 35 | 田羽根-2 | NO. 330 (分類 29-B) |
| 文化財指定等なし | | | |



〔資料来歴〕

地方名 ニニンビキロクロ(二人引きろくろ)
 採集地 岡山県真庭市湯原町田羽根
 所有者 小掠直樹
 採集年 昭和47年3月

〔移住史〕

直樹家は古くは田羽根町の奥にある隠谷(カクシダニ)にあったという。天保6年(1835)の隠谷における寺宗門帳記録あり(茂助)。(以上真庭市湯原町の浜子尊行氏による。)このことから、同家は古くからの木地屋で蛭谷系の氏子狩りを受けていたものと思われる。

〔保存状態〕

良好な状態で木質の劣化はほとんど見られない(前左側支柱の頭部に腐り)。
 全体に黒色、煤かあるいは何か塗ってあるのか。重厚で端正な造形美を持つ。



〔観察記録〕

基本データ = 全長1095mm、軸長843mm、軸径約75mm(74~76)

全体のバランスがよく、形の整った重量感のある大型ろくろである。
 <支柱・軸受>タテ受け型、支柱上部を細い紐で縛ってあるが、あまりに細く新しいので後に補ったものであろう。
 後部軸受の形に特徴あり。左右の面取りの幅が大きく、上面の幅が狭くなっている。軸受部の長さもNO.331、332のように極端に長くはない。注油孔なし。
 <軸> 爪は4本平行型。長さ42ミリで太くてがっちりした爪である。軸は直通的の円柱で径が75ミリと太め。軸受部はシンプルな段欠き型で段は浅い。

<台> 厚み、長さともにあって、どっしりとした感じ。台の前部、上辺が丸く面取りされている。他の辺はわずかな面取りで直線的な処理。前部はT字型だが左右対称で、T字の大きさはNO.331、332に比して小さい。したがって平面図で見れば胴の部分が長くなり、他の2つとは印象が異なる。

<その他>

軸受部を分解できなかったが、注油孔なしで円滑な回転をどう確保したのか。

| | | | |
|-----------|---------|-------|-------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県立博物館 | | |
| 調査台帳No. | 36 | 田羽根-3 | NO. 331 (分類 29-B) |
| 文化財指定等 | なし | | |



〔資料来歴〕

地方名 ニニンピキロクロ(二人引きろくろ)
 採集地 岡山県真庭市湯原町田羽根
 所有者 小掠直樹
 採集年 昭和47年3月

〔移住史〕

直樹家は古くは田羽根町の奥にある隠谷(カクシダニ)にあったという。天保6年(1835)の隠谷における寺宗門帳記録あり。(茂助)(以上真庭市湯原町の浜子尊行氏による。)このことから、同家は古くからの木地屋で蛭谷系の氏子狩りを受けていたものと思われる

〔保存状態〕

良好な保存状態であるが、NO.332より古く、使い込まれた感じがする。全体に黒ずみ、軸には光沢がある。木質の劣化は見られないが、支柱付け根のくさびが腐っている。

〔観察記録〕

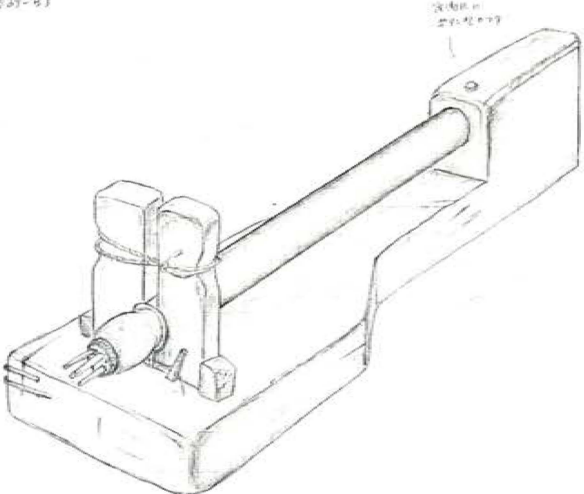
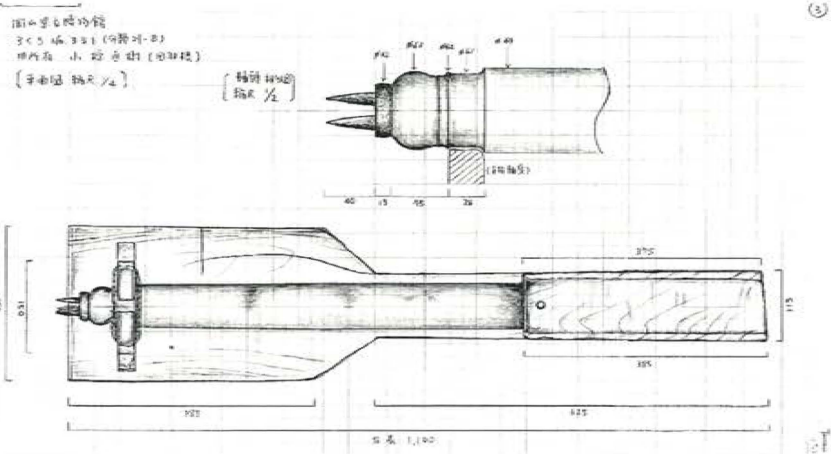
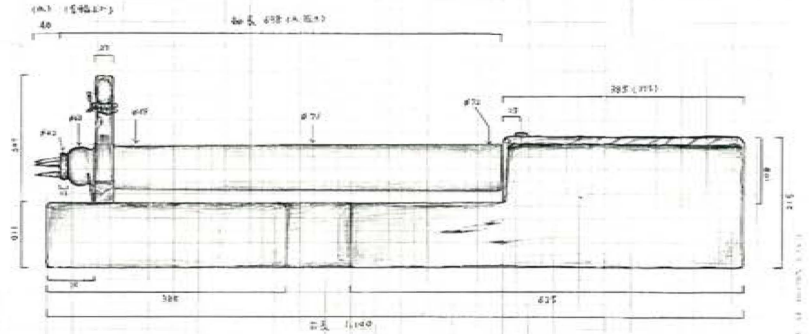
基本データ = 全長1100mm、軸長698mm、軸径約70mm、重量未計測

どっしりとした重量感のある大型ろくろである。(NO.332より少し小ぶり。)

<支柱・軸受> タテ受け型、支柱上部を細縄で二巻結わえてある。支柱軸受部の半円弧はかなり雑な作りで、ふちがギザギザになっている。後部軸受は、NO.332ほど極端ではないが、一般のものより幅が細く長い。支柱の手前側にわずかな切込み(へこみ程度)が認められる。(作業痕)
 <軸> 爪は4本平行型。軸は直通の円柱でろくろ目はなく平滑で、光沢あり。軸受部はシンプルな段欠き型で段は浅い。軸頭部は擬宝珠型。金輪、爪にかなりの錆が出ている。

<台> 厚み、長さともにあって、どっしりとした感じ。鋸痕は認められず全体に手斧で仕上げた痕が見られる(台の木口部分も)。左右対称のT字型で、その大きさは台の半分近くになる。胴の部分が極端に細く短い。幅は軸径よりわずかに広い程度。台尻の仕上げが不整形。

<その他> 注油孔あり、木製のボタン型の栓あり。

| | | | | | |
|---|----|---------------------|---|---------|-----------------|
| 台帳番号 | 36 | 岡山県真庭郡田羽根 [岡山県立博物館] | 現地名 | ニンビキロクロ | 田羽根-3(資料No.331) |
| <p>[見取図] (資料No.331)</p>  | | | <p>[平面図]</p> <p>田羽根-3の平面図 3×5×16.3mm (9.5mm×3mm) 田羽根-3の平面図 (田羽根-3) [手書き 縮尺 1/4]</p>  | | |
| <p>[正面図]</p> <p>なし (収納状況により作図不能)</p> | | | <p>[側面図]</p>  | | |

| | | | |
|-----------|---------|-------|-------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県立博物館 | | |
| 調査台帳No. | 37 | 田羽根-4 | NO. 332 (分類 29-B) |
| 文化財指定等 | なし | | |



〔観察記録〕

基本データ=全長1370mm、軸長945mm、軸径70mm、重量23kg 大型ろくろ

＜支柱・軸受＞ タテ受け型、支柱上部を細縄で7、8回結わえてある。その支柱の間にくさびが挟まれている。軸の締め付け調節の為か珍しいやり方である。支柱軸受部は半円弧というより丸みのある「くの字」型。後部軸受は、一般的なものに比べて幅が細く、長い。特異な形状である。

＜軸＞ 爪は4本平行型。軸は直通の円柱でろくろ目はなく、非常に長い。軸受部は単純な段欠き型で段は浅い。後部軸端は鉄芯による軸受。

＜台＞ 厚み、長さともにあって、どっしりとした感じ。丸みが少なく全体に直線的な印象。前部のT字部は左右対称で、台全体の前半分ぐらいを占める大きさ。その一方で、胴の部分が極端に細く短い。幅は軸径よりわずかに広い程度。

＜その他＞ 注油孔あり、鉄片を鋸止めた蓋あり。台には釘など認められず。

〔資料来歴〕

地方名 ニニンビキロクロ(二人引きろくろ)

採集地 岡山県真庭市湯原町田羽根

所有者 小掠直樹

採集年 昭和47年3月

〔移住史〕

直樹家は古くは田羽根町の奥にある隠谷(カクシダニ)にあったという。天保6年(1835)の隠谷における寺宗門帳記録あり。(茂助)(以上真庭市湯原町の浜子尊行氏による。)このことから、同家は古くからの木地屋で蛭谷系の氏子狩を受けていたものと思われる。

〔保存状態〕

木の色や木肌から比較的新しい資料と思われる。痛み、汚れ等が少ない。

台前部(爪・軸頭)付近が局部的に煤けて黒いが、他はきれいな状態。

右手など木地屋地名として知られる多くの集落が点在し、このあたり一帯における木地屋の活動が近世以前に遡り得ることを窺わせる。「東寺百合文書」の文永8年(1271)「新見荘惣検作田目録」には「轆轤師給」という給免田畑の記載があり、岡山県最古の木地師関係文書であるという⁽¹⁾。この地域での彼らの活動の古さを示すものと言えるだろう。

ここで注目すべきは、この氏子駄帳への「田羽根」の登場が正保4年(1647)以後18回ほぼ継続して第21号簿冊の文政13年(1830)まで続いていることである。田羽根木地屋は田羽根本村(現国道313沿い)の他に、その北東の賢備山麓にも分散して住んでいたと見られ(隠谷、白根、けんぴ、そば谷など)、それらを含めて江戸末まで常に氏子狩に応じていたのである。この木地屋の来歴についてはおおよそ3つのグループにしばられ、それぞれ東側に隣接する富村(現鏡野町)から賢備山を越えて移って来たものと考えられている⁽²⁾。その年代については氏子駄帳の記録以前のことで、今のところ確認するものはない。木地業の姿については、本村古老小椋明氏からの聞き取りで祖父の代までは二人挽きろくろでもっぱらお椀を作っていたこと、田羽根には塗師屋も三軒あったこと、父(町内から婿入り)の代は足踏みろくろで椀木地を作り漆器産地の郷原へ出していたこと等を知ることが出来た。本村から少し離れた白根では小椋右太氏から、田羽根が古くから漆器まで製品化していたこと、塗師屋が三軒あり、いずれも小椋姓でそれぞれ上塗り、中塗り、下塗りと専門が別れていたこと、製品は膳椀、盆が主であったこと、津山の殿様に毎年新年には新しい漆器を納めていたこと等を聞くことが出来た。⁽³⁾

(3) 田羽根のろくろはなぜ巨大化したか

田羽根木地屋のおおよその姿を知ることが出来たが、もう一度氏子駄帳の記録を調べてみれば江戸中期から後期にかけて賢備山麓の木地屋が本村へ集まって来る様子を窺うことが出来る。寛延4年(1751)には白根3戸・隠し谷2戸・田羽根村(本村)9戸であったものが、安永9年(1780)には田羽根村(本村)12戸に、寛政11年(1799)にはけんぴ山1戸・田羽根山(おそらく本村)18戸へと推移しているのである。⁽⁴⁾

また原木の入手方法について先の小椋明氏は山で伐採した丸太を家に運んで大鋸で玉切って、ろくろに掛けたと話しており、一方小椋右太氏はトチまたはケヤキを山で小さくして家に運んだ、ろくろは重たく爪が4本あった、と語っている。これらから判断して田羽根の木地屋の多くは江戸後期頃には定住に転じ、材料も家に運んで加工する生活に移行したものと推測できる。これがろくろの大型化の背景にあったことは間違いない。ただお椀に特化した木地作りでここまで大型化する必要があったのか、別の要因も考えなければならないだろう。また、軸と軸受の構造は4点の資料でほぼ共通しているが、台の形状が少しずつ変化している様子が見て取れる。それぞれの資料の製作年代は不明だが、「田羽根-3」、「田羽根-4」に見られる支柱基部(T字部)や後部軸受の肥大化と胴部のスリム化は「田羽根-1」、「田羽根-2」からの形態的工夫の結果ではないだろうか。それがどのような動機によるかは不明である。ちなみに田羽根木地屋がかつて居たと伝えられている苫田郡富村については未調査であるが『富村史』にろくろの写真が掲載されており、「田羽根-1」、「田羽根-2」によく似た形態で、引綱の把手は輪型で「田羽根-4」と同じである。

2 旧上斎原村赤和瀬（現鏡野町）

（1）赤和瀬のろくろの概要（木地師の館蔵 資料1～3）

1）赤和瀬 木地びきろくろ1 （調査台帳番号 46）

基本構造はタテ受型の支柱で、軸径 62 mmの直通の軸を持つ。軸受は単純な段欠き型で、軸頭もわずかに丸みを帯びたネギ坊主型に4本平行型の爪を持つ。比較的大型で重量感のある古いろくろだが、田羽根のろくろとの大きな相違点は支柱基部（T字部）が短く、支柱の台として必要最小限の形、大きさを確保した印象である。支柱の付け根には角釘が斜めに曲がって打ち込まれている。後部軸受も特別の意図的な工夫は見られず注油孔はスライド式の蓋に対応した構造である（ふたは欠）。また引き綱の把手は小さな木片の中央部にくびれを作りそこに引綱を結わえ付けた、いわゆる鼓型である。これらはいずれも田羽根には見られない特徴である。ただろくろ本体の大きさに比して爪部が小さいのはお椀製作に特化したもので、この点は田羽根と共通する点である。

2）赤和瀬 木地びきろくろ2 （調査台帳番号 47）

展示解説には「旧所有者小椋作治郎が明治 10～25 年ころに入手し、土間でおもに椀を作っていた」とある。基本構造は前の資料1と変わらずタテ受型で軸径 71 mmの直通の軸にシンプルな軸頭を持つ。異なるのは爪の長さで 59 mmと長く、形も鋭くとがった4本平行爪である。また注油孔は後部軸受の上面に丸い穴を開けただけの単純なものである。軸受は浅い段欠き構造であるが、支柱軸受を構成する向かい合った半円弧の中央にV字の溝が刻まれているのが注目される。田羽根では資料「1」以外では見られなかったが、赤和瀬では3点とも同様の溝があり、特にこの資料ではV字が深いので、軸を装着しても脇から見えるほどである。（図参照）

3）赤和瀬 木地びきろくろ3 （調査台帳番号 48）

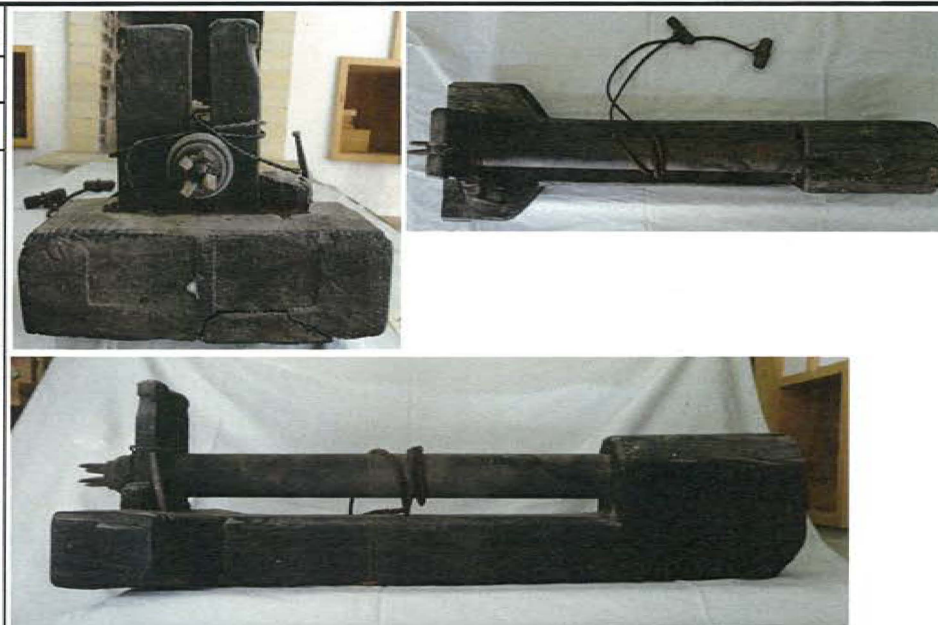
黒く煤けて、錆や木質の劣化が進んでおり調査した3点の資料の中では最も古いと考えられる。基本構造は同じタテ受型だが軸は 49 mmと3点の中では最も細い。軸頭はほぼ球形のネギ坊主型で、3分の1ほどを欠損している。爪は短い4本平行型で金輪が幅広であるのが特徴。支柱基部（T字部）は極めて短く3点の中で最小、付け根には古く錆びた角釘が斜めに打たれている。

（2）赤和瀬木地屋の歴史

赤和瀬は旧上斎原村の北端にあつて鳥取県とは山一つで接している中国山地の奥地である。『上斎原村史』によれば木地屋集落として中世末には開かれ、江戸期を通じて氏子駈帳に登場することから早くから定着帰農していたものと考えられている。⁽⁶⁾ 確かに蛭谷の氏子駈帳では明暦3年（1657）の2号簿冊から11戸の集落として名前が見えるが、なぜか1号簿冊には記録がない。しかしその後明治5年（1872）まで18回に渡って10戸前後の規模で氏子狩を受けている。⁽⁷⁾

そこで行われていた木地業の概要について村史を参照すれば、ここの木地屋はブナ材を

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県苫田郡鏡野町上斎原1805-12 (赤和瀬・木地師の館) |
| 調査台帳番号 | No.46 岡山赤和瀬 赤和瀬-1 |
| 文化財指定等 | |



基本データ=全長910mm 軸長665mm 軸径62mm 重量14kg

<観察記録>

〔形式・概要〕大型のタテ受型ろくろ。支柱の幅、高さが左右で異なる。

〔支柱〕支柱の軸受部は半円弧の中央にくの字の切込みあり。(左右とも) 支柱手前側にわずかな凹みあり。鉋を固定した作業痕程度のもの。

〔軸受〕単純な段欠き構造。

〔軸〕軸の形は円柱型で全体に平滑でろくろ目なし。軸長665mm。径は前端が60mm、後端62mm。

〔後部軸受〕背面を丸く削り落とした独特の形。注油孔は四角の深い穴の底に更に小さな角穴があり、その底に注油孔あり。蓋なし。

〔爪・軸頭〕爪は4本平行型、短く幅広の爪が埋め込まれ、中央に5mmほどの芯あり。軸頭は小さなネギ坊主型。

〔台〕形状はトンボ型で、T字部は短く胴が長い。後部軸受は本体一体型。台の側面上辺に一樣に面取りあり。全体の仕上げは手斧によるもので、鋸の使用は認められない。

〔その他〕細めの引綱が付いている。綱の端には鼓型の持ち手がある。輪型はよく見かけるが鼓型は珍しい。

<資料来歴等>

〔地方名〕木地びきろくろ

〔採集地〕岡山県苫田郡上斎原村 赤和瀬集落

〔製作地〕同 〔使用地〕同

〔来歴〕

〔保存状態〕黒く煤けているが保存状態はよく、木質の劣化もない。

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県苫田郡鏡野町上斎原1805-12 (赤和瀬・木地師の館) |
| 調査台帳番号 | No.47 岡山赤和瀬 赤和瀬-2 |
| 文化財指定等 | |



基本データ=全長925mm 軸長695mm 軸径71mm 重量16kg

<観察記録>

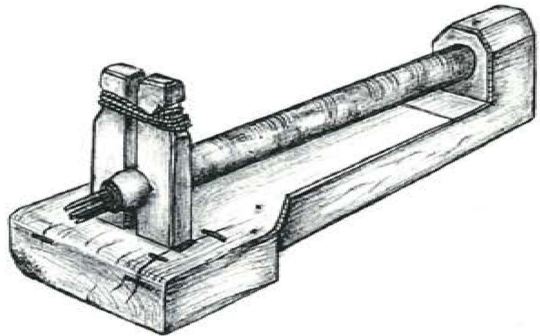
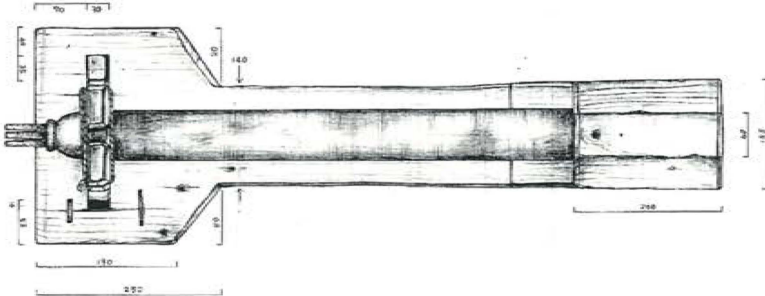
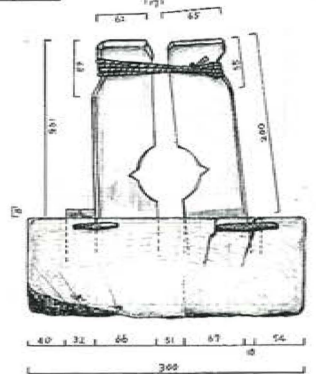
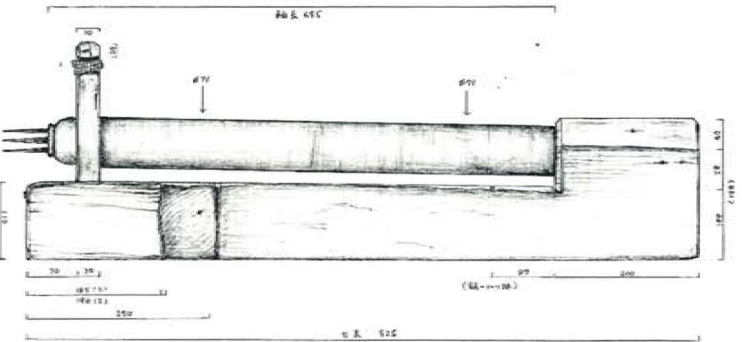
- [形式]大型のタテ受型ろくろ。引き綱は欠損。
- [支柱]支柱の軸受部は半円弧の中央にくの字の切込みあり。かなり深いので軸の脇から切込み先端部が覗くほど。(左右とも)支柱には全体にわずかな面取りがあるが、切込み等は認められない。
- [軸受]単純な段欠き構造。
- [軸]円柱型で全体に平滑、ろくろ目は薄くわずかに。長695mm、径71mm。
- [後部軸受]両肩を大きく面取りしてある。注油孔は簡単な丸穴のみ。後部軸端はほぼ全体が浅く軸受の中にはまり込んでいる。
- [爪・軸頭]4本平行型、59mmと長い爪で薄くとがっている。芯なし。軸頭は小さなネギ坊主型で、金輪の断面がカマボコ型に丸みを帯びている。
- [台・その他]トンボ型でT字部は短く胴が長い。後部軸受一体型。台の側面上辺に一樣に細い面取りあり。台後部の上面に鋸の痕あり。支柱の右付け根付近に釘痕が3箇所あり。
* 爪には短い円筒形の木片が打ち込まれていて、外れなかったが木片にひび割れが貫通していて爪の全体の長さや形状を把握することができた。

<資料来歴等>

- [地方名] 木地びきろくろ
- [採集地] 岡山県苫田郡上斎原村 赤和瀬集落
- [製作地] 同 [使用地] 同
- [来歴]

赤和瀬の小椋作治郎が明治の10～25年ころに入手し、土間で主に碗を作っていた。(展示の解説)
どこから入手したかは不明だが、おそらく同じ集落内で使われていたものではないだろうか。

[保存状態] 台の下部に腐食劣化あり。ほかは良好な状態。鉄部の錆すすむ。

| 台帳番号 | 47 | 岡山県苫田郡鏡野町上斎原(赤和瀬) [木地師の館] | 赤和瀬(2) | 名称 | 木地びきろくろ |
|--|----|---------------------------|--|----|---------|
| <p>47 岡山県上斎原村 赤和瀬 木地びきろくろ(2) [見取図]</p>  | | | <p>47 岡山県上斎原村 赤和瀬 木地びきろくろ(2) [見取図 縮尺 1/2]</p>  | | |
| <p>47 岡山県上斎原村 赤和瀬 木地びきろくろ(2) [正面図 縮尺 1/2]</p>  | | | <p>47 岡山県上斎原村 赤和瀬 木地びきろくろ(2) [正面図 縮尺 1/2]</p>  | | |

| | |
|-----------|---------------------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県苫田郡鏡野町上斎原1805-12 (赤和瀬・木地師の館) |
| 調査台帳番号 | No.48 岡山赤和瀬 赤和瀬-3 |
| 文化財指定等 | |



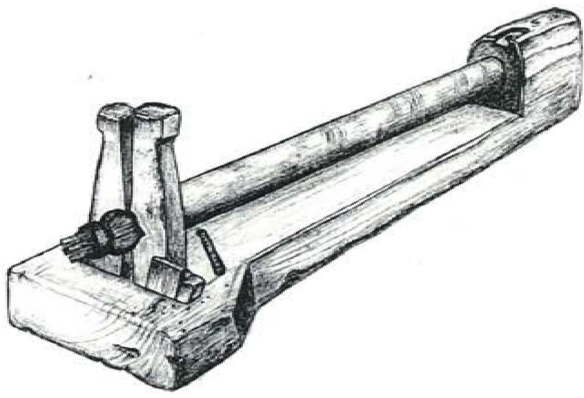
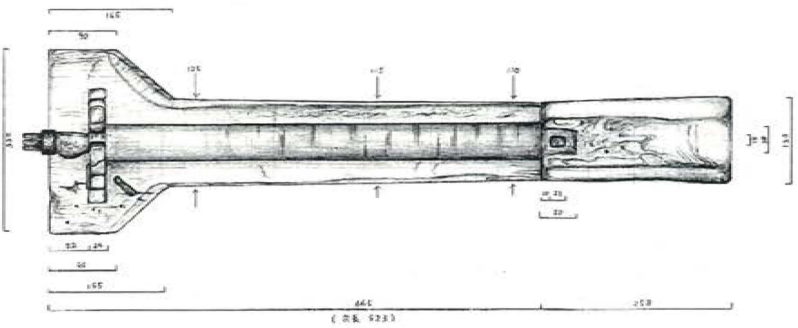
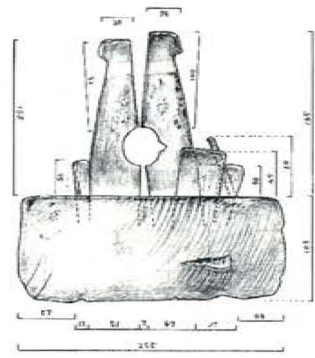
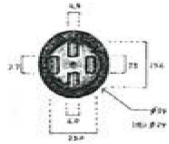
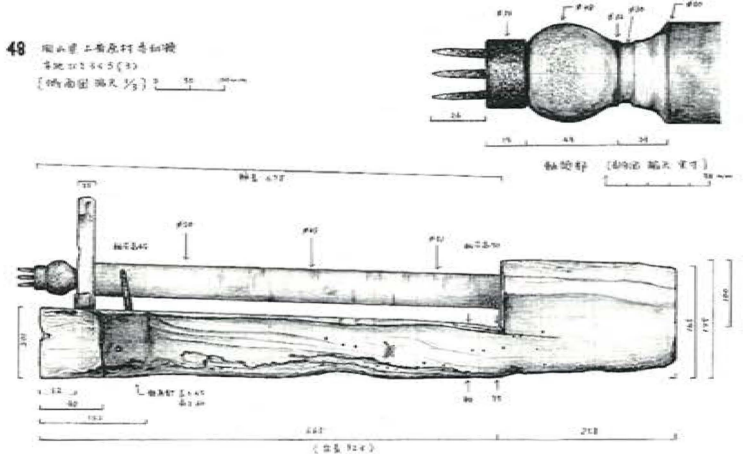
基本データ=全長920mm 軸長675mm 軸径49mm 重量9kg

<観察記録>

- [形式等] タテ受け型ろくろ、支柱結え紐、引綱ともに欠損。
- [支柱・軸受] 単純な段欠き型。軸受部の半円弧の切込みは右側支柱のみ。
もう一方の支柱の受けには切込みなし。なぜかは不明。
・支柱は上に行くほど細くなっており、高さ、幅とも左右で異なる。
- [軸] 円柱型で全体に平滑でろくろ目なし。軸長675mm。径49mmと細い。
後部軸端は上半分がほとんど軸受にはまるほどの接しかた。下側に隙間。
- [爪・軸頭] 爪は4本平行型で、長さ26mmと短く、開き幅も24mmと狭い。芯なし。
軸頭は小さなネギ坊主型で、金輪が幅19mmの筒形となっている。
- [後部軸受] 本体一体型で、注油孔は四角い掘り込みの底に更に角穴が深く開けられている。蓋なし。
- [台・その他] 台の形状はトンボ型で、T字部は短く胴が長い。

〔地方名〕 木地びきろくろ
 〔採集地〕 岡山県苫田郡上斎原村 赤和瀬集落
 〔製作地〕 同 〔使用地〕 同
 〔来歴〕

〔保存状態〕 黒く煤けて鉄部は錆がひどい。全体に古びており、台底面を中心に木質の劣化が進んでいる。虫食い孔も多く、赤和瀬の資料3台の中で最古か。

| 台帳番号 | 48 | 岡山県苫田郡鏡野町上斎原(赤和瀬) [木地師の館] | 赤和瀬(3) | 名 称 | 木地びきろくろ |
|--|----|---------------------------|---|-----|---------|
| <p>48 岡山県上斎原村赤和瀬 木地びきろくろ(3) [見取図]</p>  | | | <p>48 岡山県上斎原村赤和瀬 木地びきろくろ(3) [正面図 縮尺 1/5]</p>  | | |
| <p>48 岡山県上斎原村赤和瀬 木地びきろくろ(3) [正面図 縮尺 1/5]</p>  <p>軸頭(木地師の館) [正面図 縮尺 1/5]</p>  | | | <p>48 岡山県上斎原村赤和瀬 木地びきろくろ(3) [側面図 縮尺 1/5]</p>  | | |

使ってお椀の他、丸盆、丸膳等を主に作っていたという。その仕事は明治30年ころまでは手引ろくろが使われ、それ以後は水車ろくろに移行して大正時代中頃で木地の仕事は終わったという。また塗についても、柿渋と木炭粉で下地を整え一回だけの漆塗りをかけて製品としていたというから、日常使いの雑器であったと思われる。明治時代にはこれらの製品が鳥取県の倉吉や地元の津山、上斎原の本村に出荷されていたという。⁽⁸⁾

(3) 赤和瀬のろくろの系統

赤和瀬の木地業の様子や歴史を踏まえて、もう一度3点の資料を検討してみたい。中国山地の奥地に古くから木地屋集落として定着していたことは田羽根と同じ歴史を辿っていたようにも見えるが、ろくろの構造・形態にはかなりの違いがある。大きさについても一回り小ぶり、重さも10数キロと際立って重いわけではない。また外観上最も目立つ相違は台前方のT字部や後部軸受の形である。赤和瀬の資料には田羽根のように極端な肥大化はみられず、T字部などはむしろ一般的なものより小さいくらいである。このほかにも注油孔の構造、引綱の把手の形状なども基本的なコンセプトが異なる。これらを勘案して判断すれば、赤和瀬と田羽根の木地屋は別系統の歴史を歩いてきたとみて間違いないだろう。このことは更に広域で見た場合に別の地域とのつながりも見えてくるのではないだろうか。

3 旧奥津町（現鏡野町）

(1) 旧奥津町の轆轤とその歴史背景

1) 木地用ロクロ（奥津歴史資料館蔵 資料 No.0190）（調査台帳番号 49）

台長 1020 mmの大型ろくろである。基本構造はタテ受型、軸は直通で最大径は75 mmとかなり太い。T字部は短く左右対称型（綱取りの側が丸みを帯びている。平面図参照）である。軸頭はわずかに丸みを付けたシンプルなネギ坊主型で、爪は厚みのある鉄棒を加工した頑丈な作りの4本平行型である。支柱の付け根には14 mm角の鉄棒が斜めに打ち込まれている。煤などの付着がなく木目を確認できる保存状態のいい資料であるが後部軸受が部分的に木質の劣化がひどい。

本資料の来歴については詳しいことは不明であるが、旧津山東高校の苫田分校に所蔵されていたものが旧奥津町の奥津歴史資料館に移管されたもののようである。奥津町は上斎原村の南に隣接し町域の西側は中国山地の奥地で、赤和瀬や田羽根と同様古くから木地屋が入り込んでいた地域である。蛭谷氏子駈帳では正保4年（1647）の第一号簿冊に「作州大田木地屋」（奥津町羽出西谷）として最初の記録が残っている。以後17回にわたり文政13年まで江戸期を通じて10数戸から30戸ほどの木地屋が奥津町内に留まり、羽出、神原、羽出西谷、大田などの集落を形成していた。おそらく岡山県内の中国山地を活動の場として半農耕的定住をしていた多くの木地屋と同様の歴史を歩んでいたのではないだろうか。

この資料は、そうした木地屋たちが使っていた手引ろくろの一つと思われる。構造・形態的特徴は隣接する赤和瀬のろくろに極めてよく似ている。

4 旧勝田町右手木地山（現美作市）

（1）右手木地山のろくろとその歴史背景

1）ロクロ（木地師の館所蔵）（調査台帳番号 50）

国内各地のろくろを見渡して恐らく最もユニークなろくろと言っているだろう。それほど伝統的なろくろの構造にとらわれない独特の発想が随所にみられる。基本構造はタテ受型だが、支柱上部に結え紐はなくヨコ受型のような横棧が二本の支柱を貫通している。この横棧は一端が少し幅のある頭を持ち、支柱を貫いたもう一端は細く、そこを上から割り込みのクサビで締めている。また支柱の軸受部分は半円弧ではなく台形の切込みとなって、軸との接点は各支柱二カ所の角が軸と接して支えている。後部軸受は台と一体だが、軸端の鉄芯を受ける部分は別材をはめ込む二木式となっている。爪は4本平行型だが軸頭には金輪がない。爪には内径 50 ミリの木製カップが正確に打ち込まれている。手前の支柱付け根には小さな角棒がはめ込まれているが高さは 30 mm 程度と短い。またもう一方の支柱下には 50 mm ほどの幅の薄板がはめ込まれているが用途は不明。台形はトンボ型で全体に面取りが多く丸みを帯びた外形である。以上の特徴はどれ一つをとっても他に例がない独特のものである。館の展示解説には 200 年ほど前に使われていたろくろとあるが、木質の新しさと斬新と言っているほどの構造はとてもそれほどの古い資料とは思えない。

第2節 鳥取県のろくろ

中国山地の日本海側に位置する鳥取県も、古くから木地屋が山麓の資源を目指して活動していた。その主なエリアは東から八頭郡の若桜町、智頭町に一つの集積があり、東伯郡では岡山の上斎原と背中合わせの三朝町・関金町、そして西の大山山麓付近である。木地屋の活動の歴史がありながら実際に調査できたのは三朝町栗祖の手引ろくろ 1 点であった。

（1）三朝町栗祖のろくろとその歴史背景

1）ろくろ（鳥取県立博物館蔵 資料 No.350-01）（調査台帳番号 52）

台長 1,245 mm、軸長 968 mm の非常に大型のろくろである。基本構造はタテ受型で最大径 73 mm の直通の軸を持つ。形態的には台前方の T 字部が台全体の三分の一を超える大きさで、胴部が極端に細くなる。軸頭は小ぶりのネギ坊主型に 4 本平行型の短めの爪が付いている。引綱には輪型の把手があり、輪の大きさが異なるのはどちらかを更新したからか。（小さい方が黒光して古く見える。）

こうして見てくると、ほとんどの特徴が岡山県田羽根の資料（田羽根-4）と重なることがわかる。これだけ特徴的な作りのろくろを使っていながら双方の木地屋に何のつながりもないとは思えない。ただ残念ながら栗祖の木地屋についてその来歴等の情報は把握できていない。博物館の資料台帳にも所有者情報をはじめ栗祖木地屋に関して記入はなかった。

第3節 中国地方のろくろ（まとめ）

ここまで中国地方で調査した手引ろくろ 10 点について、それぞれの特徴とそれを使ってきた木地屋の歴史について概略を見て来た。ここではそれらを全体として眺め、中国地方という枠組みの中での相互の関連や中国地方の木地屋の特質を考えてみたい。

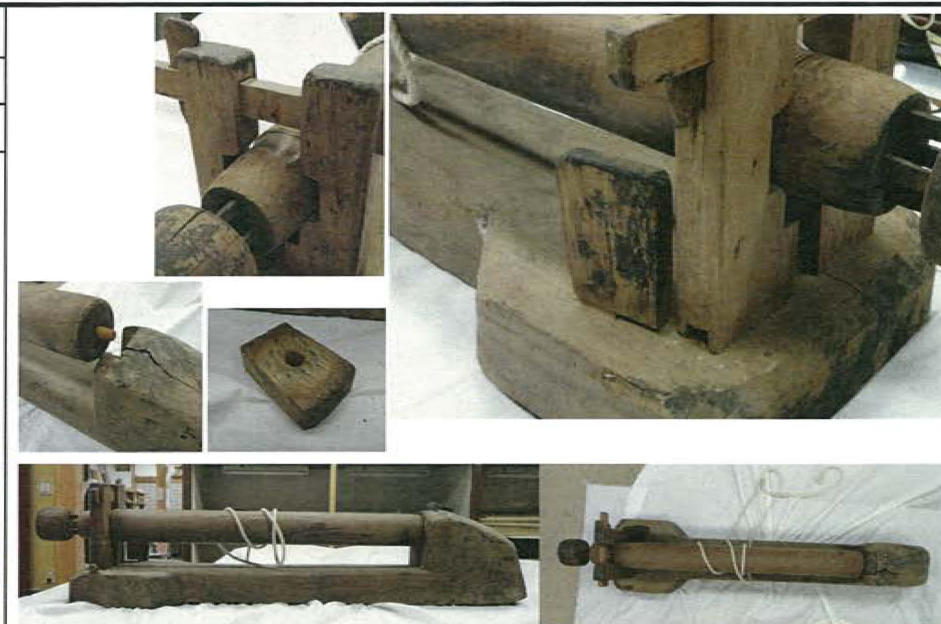
| | | | |
|-----------|--------------------------|-------|--|
| 資料所在地(施設) | 岡山県苫田郡鏡野町奥津82-1(奥津歴史資料館) | | |
| 調査台帳番号 | No.49 | 奥津町羽出 | |
| 文化財指定等 | | | |

〔地方名〕 ろくろ
〔採集地〕 岡山県苫田郡奥津町羽出 千軒
〔製作地〕 同 〔使用地〕 同
〔来歴〕 津山東高校奥津分校が所蔵していた資料を、その後奥津歴史資料館に移管して展示している。

〔保存状態〕 煤等の黒ずみはなし。木目の見える明るい木肌で保存状態は良好。但し後部軸受の背面から下側にかけては腐って劣化が著しい。

| | | |
|--|--|--|
| <div data-bbox="1093 213 1603 563"> </div> <div data-bbox="1610 213 2027 612"> </div> <div data-bbox="1093 617 1740 834"> </div> | | <p>基本データ＝ 全長102.0cm 軸長84.8cm 軸径7.4cm</p> <p>＜観察記録＞</p> <p>〔形式〕かなり大型のタテ受け型ろくろ、支柱結え紐は後補。引綱は欠損。</p> <p>〔支柱・軸受〕単純な段欠き型。右側支柱の軸受半円弧に浅くわずかな切込みがある。左側には認められず。支柱上部の結え紐の溝はごく浅い。右支柱の中ほどに浅い凹みあり。</p> <p>〔軸〕長さが848mmと長く、径も74mm、ほぼ直通の円柱型。</p> <p>〔軸頭〕軸と同じ径で少し角を丸めた程度のシンプルなもの。金輪は厚みと幅のあるしっかりしたもの。</p> <p>〔爪〕4本平行型、爪の長さは40mm程度だが、幅が13～14mmと広く、厚みのある頑丈なもの。</p> <p>〔後部軸受〕注油孔は小さく簡単な細工。四角い掘り下げの底に丸い穴。</p> <p>〔台〕トンボ型で、T字部の正面左側にわずかな面取り。形が丸みあり。右支柱の付け根に角棒が斜めに打ち込まれている。</p> |
|--|--|--|

| | |
|-----------|------------------------|
| 資料所在地(施設) | 岡山県美作市右手2461-2 (木地師の館) |
| 調査台帳番号 | No.50 右手木地山 |
| 文化財指定等 | |



基本データ＝ 全長101.5cm 軸長79.5cm 軸径8.0cm

<観察記録>

〔形式・概要〕 他に例のない極めてユニークな構造の手引ろくろである。

タイプとしてはタテ受型であるが随所に独特の細工がされている。

〔支柱〕二本の直立した支柱で軸を挟んでいるが、支柱上部は結え紐ではなく支柱を串刺しにする横棧が通り、左側の大きなクサビで締めている。したがって横棧の右端は太く作られ、ボルトの頭の役目をしている。

〔軸受〕単純な段欠き構造であるが、支柱側の受けがユニークで、半円弧ではなく直線的な台形が刻まれ、その角の4点で軸を支えている。

〔軸〕直通の円柱型。

〔後部軸受〕軸受は本体と一体であるが鉄芯の差し込まれる部分に小さな板材を埋め込み、そこに受けの穴が開けられている。(二木式)

〔爪・軸頭〕爪は4枚平行型。軸頭は軸とほとんど同じ径まのまま断ち切られて、金輪はない。爪には木製のアダプターが打ち付けられている。恐らくこのアダプターを使ってすべての作業をしていたために、軸端を金輪で補強する必要がなかったのではないかと推測される。台はトンボ型で左右対称。

* 右支柱の付け根に短い鉄棒。左支柱の付け根には幅広の板。役割不明。

〔地方名〕 ろくろ

〔採集地〕 岡山県美作市右手 木地山

〔製作地〕 同 〔使用地〕 同

〔来歴〕 展示解説には200年前の物と推定されるとあり、同地で古くから使われていたように書かれている。しかし木質の新しさや、独創的な形式からみてそれほど古いものとは思えない。むしろ新しいろくろではないか。

梶並川の上流、右手の木地山地区は今から約450年ほど前から木地師が住みつき、大正末期には43世帯もの木地師が生活を営んでいたという。
(木地師の館パンフより)

〔保存状態〕 ほとんど傷みはなく、木肌の状態もきれいである。

| | | | |
|-----------|-------------------------|-------|-------------|
| 資料所在地(施設) | 鳥取県鳥取市東町2-124 (鳥取県立博物館) | | |
| 調査台帳番号 | No.52 | 三朝町栗祖 | 資料番号 350-01 |
| 文化財指定等 | | | |



基本データ=全長1245mm 軸長968mm 軸径70mm 重量20.4kg

<観察記録>

〔形式・概要〕 非常に大型のタテ受型ろくろ。

岡山県立博物館の田羽根の資料によく似た特徴を持っている。

〔支柱〕支柱は手前が高く、奥(左)は短い。結え紐のくびれは同じ高さであることから、当初からそろっていなかったと思われる。

〔軸受〕単純な段欠き構造。支柱の受けは半円弧で中央にかなり深い切込みがある。(7~10mm)切込みには綿くずが付着。ごみなのか、つけてあるのか。

〔軸〕直通の円柱型。全体に粗いろくろ目が残っている。

〔台〕トンボ型であるがT字部が長く、全体の半分近い。胴部は非常に細く、軸と同じくらいの幅しかない。左右対称で左側にわずかな面取り。

〔後部軸受〕台と同じ幅で細く、高さがあるので断面は縦長となる。芯は鉄。

〔爪・軸頭〕爪は4枚平行型。軸頭は軸径より小さなネギ坊主型、金輪あり。

爪の長さは短く27mm、全体の大きさからみて不釣り合いなほどの短さ。

〔釘等〕支柱手前の付け根に薄い鉄棒が打ち込まれている。

注油孔あり、蓋なし。後部軸受はわずかにオーバーハング、軸端の上半が軸受に埋まる状態。下半分にわずかに隙間あり。

〔地方名〕 ろくろ

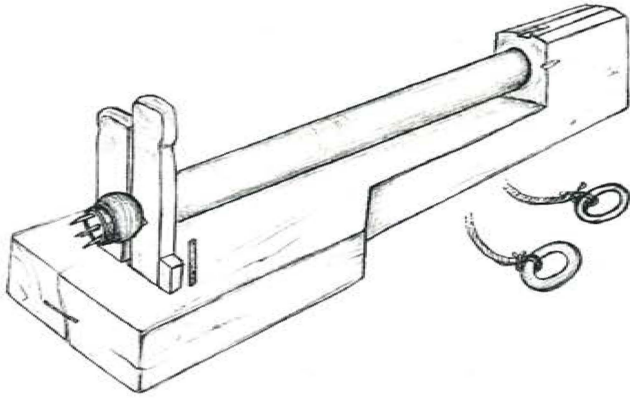
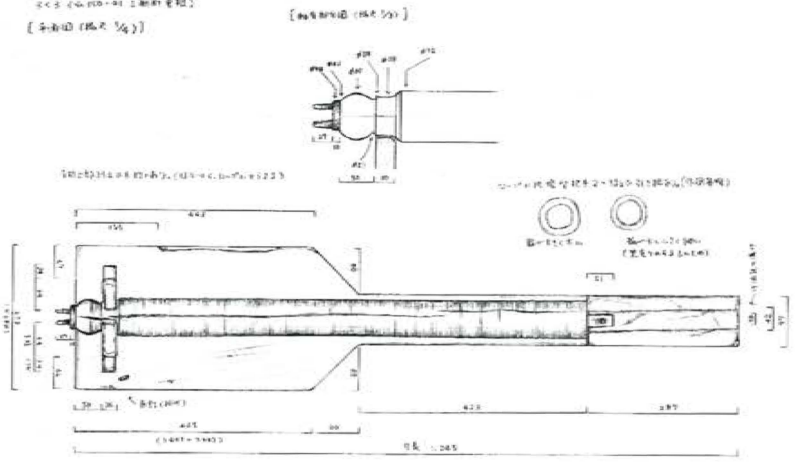
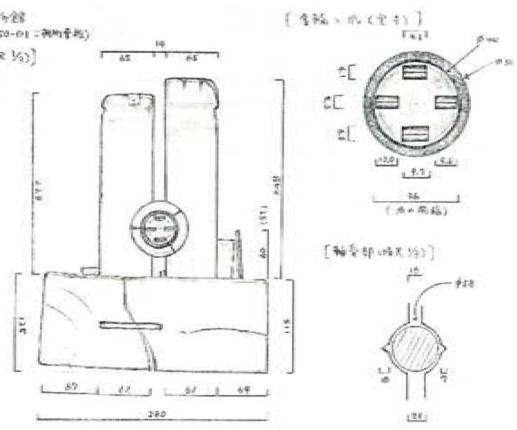
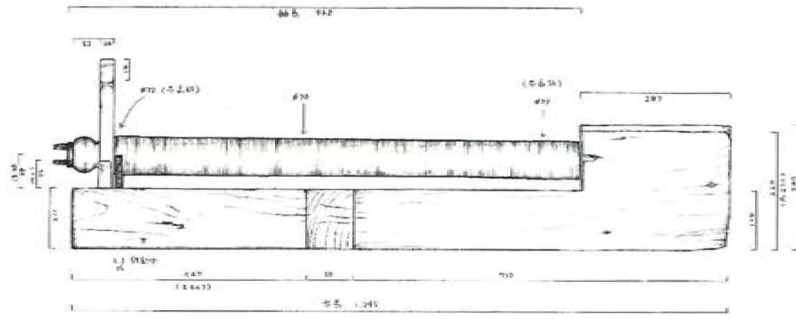
〔採集地〕 鳥取県三朝町栗祖

〔製作地〕 同

〔使用地〕 同

〔来歴〕 不明

〔保存状態〕 煤で黒光しているがほとんど傷みはなく、木肌の状態もきれいで引綱及び円環型の把手あり。大きさ、太さが異なる円環である。

| 台帳番号 | 52 | 鳥取県三朝町栗祖 [鳥取県立博物館] | No.350-01 | 名称 | ろくろ |
|---|----|--------------------|--|----|-----|
| <p>【見取り図】</p> <p>ろくろ (No. 350-01 三朝町栗祖)</p> <p>【見取り図】</p>  | | | <p>【平面図】</p> <p>⑪ 鳥取県立博物館 ろくろ (No. 350-01 三朝町栗祖) 【平面図 (拡大 1/4)】</p>  | | |
| <p>【正面図】</p> <p>⑫ 鳥取県立博物館 ろくろ (No. 350-01 三朝町栗祖) 【正面図 (拡大 1/5)】</p>  | | | <p>【側面図】</p> <p>⑬ 鳥取県立博物館 ろくろ (No. 350-01 三朝町栗祖) 【側面図 (拡大 1/4)】</p>  | | |

双方の木地屋で使われていれば、そこに何らかの関係があったと想定して間違いないだろう。その場合はどちらがあの形を先に生み出したかが問題になる。移住の歴史等の文献が確認されれば何等かのつながりが判明するかもしれない。一方、栗祖と山一つで背中合わせにある赤和瀬のろくろには栗祖・田羽根の特徴が見られず、類似の資料は南に下がった旧奥津町羽出のろくろの方であった。むしろこの図を眺めれば、これだけ密集した木地屋の一大集積地でありながら、個々の集落ごとにろくろの構造・形態に違いのあることの方が不思議であり、そこにどのような背景があるのか、それこそが問題であるとも言える。

旧勝田町右手木地山のいわば突然変異のようなろくろも、こうした背景を考える一つのヒントなのかもしれない。右手木地山は梶並川の上流に立地し、川沿いの家々は全戸小椋姓で蔵の白壁に梅鉢の紋が描かれた、きれいな集落であった。道で会った古老に聞いた話は予想外のものだった。ここの木地山は古くから木地師の歴史を持つが自分の知っている限りでは挽き物を作っていたとは聞いたことがない、と。作っていたのは杓子で、少し前までは飯しゃもじを作っていたという。確かにろくろを調査した木地師の館で展示ケースに並んでいたのは、挽き物の道具より杓子作りの方が多く、それらは古くから使われていた道具だった。推測ではあるが右手の木地屋にとってろくろを使い始めたのはそう古い話ではないのかもしれない。⁽¹⁰⁾

第4章－第1節～第3節〔注〕

- (1) 田村啓介 1995「岡山下の木地師関係資料」p34 『研究報告 16』岡山県立博物館所収
- (2) 田羽根の木地屋の歴史については当地の郷土史研究家濱子尊行氏の教示による。氏は各家系の詳細な来歴を調べており、移住に関する情報ははじめ集落の古老の紹介など種々懇切な教示を受けた。
- (3) 湯原町 1953『湯原町史 前編』p542「木地師の盛衰」には同様の記述がある。要約すれば、田羽根の木地師は江戸時代には20軒ほどあり、国守森家や松平氏に召出されて津山城下に出職し、新しいお椀を献上した時は古いものを頂いたとのこと。この拝領したお椀は現在も木地屋の旧家に保管されており、美しい金蒔絵の椀は田羽根木地師の仕事ぶりを偲ばせる。そうした田羽根の木地業も明治20年ころには衰退してしまった、等々の記述である。
- (4) 田村啓介「岡山下の木地師関係資料」p50～54の表による。
- (5) 富村史編纂委員会 1989『富村史』p350 岡山県苫田郡富村
- (6) 上斎原村 2011『上斎原村史 地区誌編』p169
上斎原村 1994『上斎原村史 民俗編』p329 (4) 木地屋の生活
- (7) 上斎原村 2011『上斎原村史 地区誌編』p171 表2より
- (8) 上斎原村 1994『上斎原村史 民俗編』p330～333
- (9) 岡山県立博物館 2013『Japan—漆の世界—』p66より「岡山県内の木地師と塗師の主な活動地と漆の産地」＊原図を一部加工した。(所在地のマークを大きくし、鳥取県の情報を追加)
- (10) 右手木地山の場合と簡単には結びつけられないと思うが、右手木地山から直線距離で

東へ 20km ほどの兵庫県旧芳賀町（宍粟市）原の木地屋の小椋 T 氏から聞いた話として興味深いものがあった。「集落には「ろくろ木地屋」と「しゃもじ木地屋」がいて、「しゃもじ木地屋」は「ろくろ木地屋」より稼ぎが少なく、格が下だった。祖父は元々しゃもじを作っていたが独学で「ろくろ木地」になり、仏壇の器等を作っていた。十歳のころ祖父がばあさんと二人でろくろの仕事をするのを見たことがある。その後足踏みろくろに変わり、父が電動に変えた。祖父は 80 歳頃まで大きな盆を作っていた。」代々受け継がれて来た伝統の職業を変えることへの近代的なチャレンジとさえいえるのだろうか。あえて技術の習得に独学で挑んだことに考えさせられるものがある。

第5章 四国・九州・沖縄地方のろくろとその歴史的背景

第1節 四国地方のろくろ

(1) 四国地方の木地屋について

まず四国における木地屋の歴史を概括するために、蛭谷の氏子駄帳データを利用して木地屋の活動の足跡をたどってみたい。⁽¹⁾ 蛭谷の氏子駄帳では、正保4年(1647)の第1号簿冊に始まり明治26年(1893)に至る全34簿冊のうち、16簿冊に四国廻国の記録が残し、延べ廻国件数は374件に上る。その内訳は、愛媛県198件、徳島県123件、高知県51件、香川県2件と、そのほとんどが愛媛県と徳島県に集中していることがわかる。⁽²⁾ 地形的に見れば四国を東西に横切る中央地溝帯の南側に沿って連なる四国山地と重なるエリアである。更に氏子駄帳から拾い出した二百数十年間に渡る木地屋集落の分布を見ればそのほとんどが二つの山系を中心に濃密に分布しており、山林資源を求めて適地を渡り歩いていた木地屋の姿を窺うことができる。この二つの山系は愛媛県の石鎚山系と徳島県の剣山系であり、それぞれの主峰は四国の最高峰石鎚山(1982m)と二番目の剣山(1955m)である。

今回ろくろの所在確認調査で資料を把握できたのは、剣山から西に流れる祖谷川流域の東祖谷山地区(徳島県三好市・旧東祖谷山村)と石鎚山の南西にある面河地区(愛媛県久万高原町・旧面河村)であり、高知県、香川県で資料の把握ができなかったことは木地屋の分布状況から見てやむを得ないことかもしれない。いずれにしてもこの二山系の森林を活動の場としてきた双方の木地屋の道具を調査できたことになる。次にこれらのろくろについて報告し検討を加えたい。

(2) 徳島県の木地屋とろくろ

① 徳島県三好市東祖谷 東祖谷歴史民俗資料館のろくろ[台帳番号 61]

木村巧氏所蔵のこのろくろは、基本構造がヨコ受型のろくろで軸は鉄軸に木管を被せてある。木管の長さが270mmと短いのが特徴である。従ってろくろ全体の印象もずんぐりしており、台長は595mm、幅が328mmである。爪の造りが独特で、鉄軸と一体の4本爪(平行型)の外側に更に3本爪のリングをはめ込んでいる。何故そこまで爪の数を増やす必要があったのかはわからないが合計7本もの爪を持つろくろは極めて珍しいといえる。台の中央には四角形の窓があげられていることから、ベルト或いは綱を軸から下げて踏み板につなぎ、足で軸を回す足踏みろくろと考えられる。後部軸受は台と一体で、材木の外形をほぼそのまま使ったかまぼこ型である。ただし軸受部のみ小さな台形の別材をはめ込んでおり、上面に注油孔が開いている。他の地方で調査したろくろと比較しても、伝統的な手引ろくろの特徴であるトンボ型の台に長い木軸という構造からはかけ離れており、そうした伝統的な構造・形態を踏襲しない職人が明治以降に製作したものと思われる。残念ながら使用者情報などの来歴が不明であり、詳細は確認できなかったが、東祖谷で使われていたことは間違いないようだ。

直接観察して作図したろくろは本資料一点であるが、これと同形のろくろが『阿波の木地師』⁽³⁾に掲載されていた。こちらは美馬郡一字村の小椋慶蔵氏所有のもので、前部軸受が鉄

製で、軸頭に木製アダプターの爪を取付けるタイプの足踏みろくろである。この点を除けば、台及び後部軸受の形状が東祖谷資料館のものとほぼ同じである。一字村は東祖谷山村と北東方向で接した隣村で剣山麓にあって木地屋集落がいくつか確認されている。そのずんぐりとしたユニークな形状はこの地域の足踏みろくろに共通する特徴と言えるのではないだろうか。

② 徳島県の木地屋について

東祖谷山に残されたろくろについてその特徴を見てきたが、次にこのろくろを使っていた木地屋について考えてみたい。祖谷山全体を見てもこの地域の自治体史には木地屋に関する歴史的な記述が多く散見され、⁽⁴⁾更に徳島県の文化財行政の中でも木地屋の歴史は一つの重要なテーマとして位置付けられていることが窺える。県の施設で編集発刊した『阿波の木地師』は包括的かつ詳細に木地屋の歴史と民俗を取り上げた労作で、県レベルでこれだけ木地屋の歴史を掘り下げてまとめた例は珍しいのではないだろうか。以下、これらの資料を参照しながら徳島県内の木地屋について述べる。

徳島における木地屋の歴史がいつ頃始まったかについては、わずかな文献資料で推測するほかないが、少なくとも鎌倉時代か南北朝の時代にその淵源を求めることが出来そうである。『阿波の木地師』では中世史料として「阿波国徴古雑抄巻二」に収録されている「徳善文書」二通を挙げている。⁽⁵⁾一つは正平11年(1356)の文書で、西祖谷山下名のろくろ師を祖谷山の豪族徳善治部亮の支配下に認める、との趣旨が記され、もう一通は康暦2年(1380)の文書で、阿波国田井庄中西郷にある轆轤師・得銭⁽⁶⁾の地を所領として認めるとの趣旨が記されている。これらの文書についてはすでに橋本鉄男も四国の木地屋の歴史を語るうえで重要な史料として取り上げており、祖谷が中世の早い時期からろくろ師が住み着いていたことを示すものだ、と述べている。⁽⁷⁾

いずれにしてもこれらを見る限り阿波の木地屋の歴史は中世に遡る古い歴史を持つことが窺える。それでは、彼らがどこから四国に渡って来て、どういう来歴の木地屋で、どのような道具を使っていたのか。このことについては資料が乏しくはっきりしたことはわかっていない。来歴について橘文策が「紀州説」と「中国説」という興味深い説を提示している⁽⁸⁾。前者は紀州から海を渡って阿波の海岸部に至り、そこから剣山周辺の山岳地帯に定着した、というもの。もう一つは山陽道から瀬戸内海を渡って伊予を経由して剣山周辺に定着した、というものである。もちろんこれは明確な根拠があつての話ではなく、おおよそ考えられる可能性としてのことと思われる。そうだとすると大変興味深く、ある意味で示唆に富む説である。

紀州との関係については、蛭谷氏子駈帳第11号(享保20年～元文2年)にわずかながらの接点が見える。享保20年(1735)に紀州黒江村を廻国した時に、勘重郎という人物の取次で阿州木地屋甚右衛門の「くわんびらき」の代金を徴収している。黒江村はいまでも黒江漆器で知られる塗り物の産地である。そして蛭谷の氏子駈帳で阿州木地屋の名が登場したのはこの箇所が最初で、その二年後の元文2年(1737)には伊予、土佐の木地屋を訪ねた後に初めて阿波の地を巡国人が訪れるのである。黒江で名前の出た甚右衛門は那賀

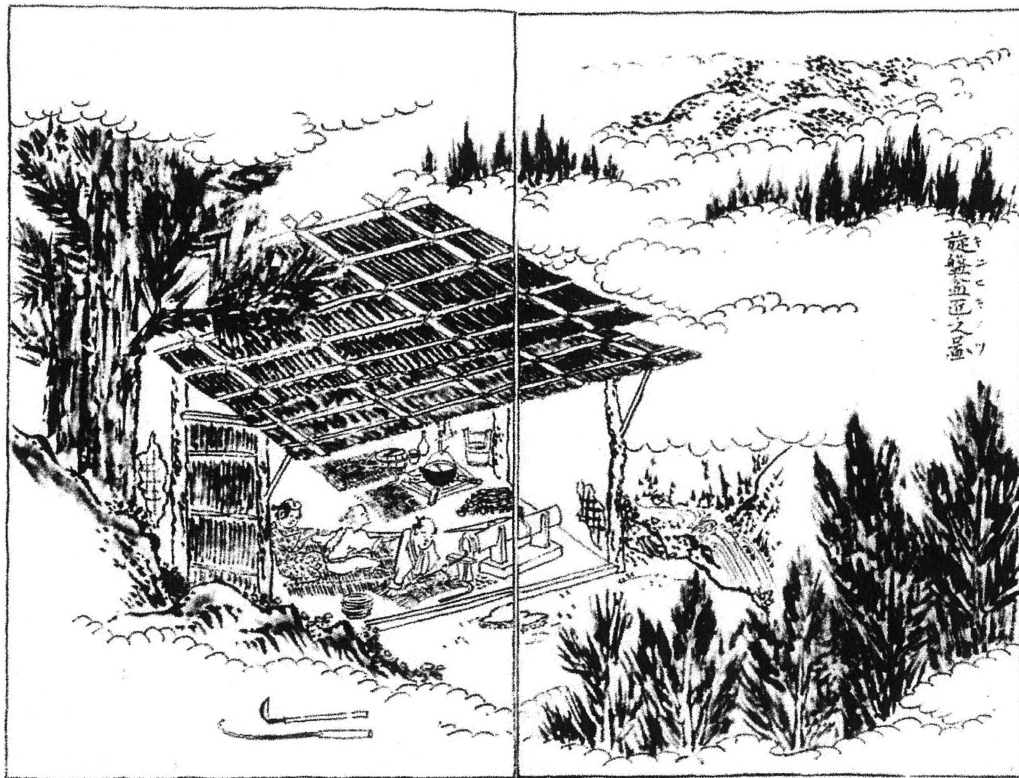
郡木頭村で小椋甚右衛門と記帳された人物と思われる。これらのことは、紀州と阿波の木地屋のつながりを示すとともに、氏子狩の廻国ルートに初めて阿波の木地屋たちが組み込まれる契機を示すものかもしれない。それまで90年もの間、四国での氏子駈りは伊予木地屋のみで終わっていたが、これ以後頻回に訪問を重ねて多くの阿波の木地屋が氏子駈帳に名を残すことになるのである。

③ 徳島県のろくろの歴史

一方、江戸時代の阿波の国ではどのようなろくろが使われていたのか、その様子を伝える貴重な史料があった。それは阿州名東郡沖洲浦の太田豊年という国学・本草学者が書き残した「茂山日記」と呼ばれる史料である。内容は享和元年（1801）に本草学の師小原春造が藩命を受けて剣山一帯の薬草調査を行った際に弟子の太田が随行して書き留めた調査記録である。その道中記の一節に東祖谷の山中で出会った木地屋の姿が描写されていた。さらに貴重なことはその記述にスケッチが添えられていることである。それはまさに素朴な手引ろくろを夫婦で操る典型的な木地屋の姿を伝えている。⁹⁾ 描かれているのは老婆と妻が二人掛りで綱を引き、主がろくろ鉋を構えて挽き物を製作している場面である。そこに描かれたろくろは、当時の手引ろくろのイメージを窺う貴重なものと言える。また二人で共に綱を引くことは、大きな器を挽くときの方法として知られているが、その具体的な姿が示されているのも興味深い。（下図参照）

↓『茂山日記』阿波の国学者・本草学者 太田豊年著 享和元年(1801)の東祖谷探訪の記録

(出典：『茂山日記 全』太田豊年(大田浦安)著 森本文庫(享保元年写本マイクロフィルム) 徳島県立図書館)



粗末な山小屋の中で主人がろくろ鉋で木地を挽き、妻と老母が引綱を引いている場面

次に、近代に入ってからのもくろの推移を検討したい。明治以降のもくろの様子についてはいくつかの文献によってかなり詳細な経過を知ることが出来る。木地屋の使う道具が明治時代に入ってから変革を迎えるのは四国に限らず各地の木地屋社会に共通していることである。その変革の時期については地域によって前後の幅があるが、もくろに関して言えばその変遷の流れはほぼ同じ道筋をたどっている。すなわち手引もくろから足踏もくろへ、そして水車もくろを経て電動もくろに至る流れである。これらの方法がどのくらいの間隔で次のステップに進んだかは地域により大きな差があり、すべての段階を経ずに移行する場合もあり、さらに大車式や発動機等の特殊な方法を間に差しはさんでいる地域もあり実態は様々である。ただ大局的にみれば前述した足踏み、水車、電動の流れといえるだろう。

では徳島におけるこうした変革はいつどのようにしてなされたのかみてみよう。

『東祖谷山村誌』にはこの間の事情が興味深く記されている。⁽¹⁰⁾ 足踏もくろの普及を語る時に必ず出てくる名前がある。一人は静岡県出身で、箱根で木地職人の修業をしたという伊沢為次郎という人物。もう一人は同じく木地職人の田代寅之助で、二人はある時期ともに東京本所で木地職人として働いていたという。この二人が明治18年に東北地方に足踏もくろの指導に訪れ、従来の手引もくろから足踏もくろへの変革の流れをもたらしたことはよく知られている。その後足踏もくろの普及指導に国内各地を回っていたようだが、その伊沢為次郎が徳島県にも足を運んでいたというのである。『阿波の木地師』によれば、明治38年(1905)に美馬郡一字村に指導に訪れ、四国へ初めて足踏もくろをもたらしたという。その最初の弟子が一字村字桑平の小椋国助(1877~1944)という代々の木地屋の継承者であった。そしてこの革新技术は、またたく間に剣山一円の木地屋たちに広まっていったという。⁽¹¹⁾ 古くから引き継いで来た伝統の技を捨て新技术に移行することは勇気のいることであつたと思うが、それほど足踏もくろの技術革新が目覚ましい成果を示したということだろう。

ここまでの流れを確認したうえで、もう一度東祖谷山歴史民俗資料館所蔵のもくろを振り返ってみたい。この資料の大きな特徴は伝統的な手引もくろの基本形態からかけ離れた独特の形状を持つことで、極端に短い軸、⁽¹²⁾ 鉄軸に木管を被せた構造、鉄軸一体の四本爪にさらに三本爪を加えた七本の爪等である。これが剣山麓の木地屋に広まった足踏もくろの形であろうか。一字村の小椋慶蔵氏所蔵の足踏もくろと形態が類似している点も考慮しなければならない。ただ、この構造・形態が伊沢為次郎の持ち込んだものかどうかについてはもう少し検証が必要である。⁽¹³⁾

(3) 愛媛県の木地屋ともくろ

① 愛媛県の木地屋について

ここでもまず蛭谷の氏子駈帳データによって彼らの歴史を概括したい。氏子駈の記録は正保4年(1647)から残されており(第1号簿冊)⁽¹⁴⁾、この時の廻国人の足取りを見ると、蛭谷を出立して最初に琵琶湖西岸の高島郡麻生村の木地屋を訪ねている。次に丹波と若狭の国境の山中を巡り、6番目の訪問地が伊予国周桑郡の石鎚である。この後石鎚山麓を巡り久万、面河を経て四国を後にし、周防、安芸へと廻国の旅を続ける。つまり愛媛県は氏子駈

の初回から廻国を受けており、それも美作、播磨、但馬という当時既に木地屋の大集積地となっていた国々よりも先に廻国人は琵琶湖西岸の地からまっすぐ愛媛を目指してきたのである。これに対して剣山麓に入った阿波の木地屋は中世に遡る古い歴史を持ちながら、近江の国から氏子駈に訪れたのは愛媛に遅れること90年の元文2年(1737)である。このことから何を読み取るかは簡単なことではないが、少なくとも伊予国の木地屋が近江の木地屋根源地と古くから繋がりを持っていたことを窺うことができる。⁽¹⁵⁾

② 上浮穴郡面河村の木地屋の歴史

愛媛県内において木地屋が最も多く入山した地域は石鎚山の西南部にある上浮穴郡内の面河村、美川村、柳谷村、久万町等であった。中でも戦後まで木地屋集落として存続していたのは面河村笠方地区の梅ヶ市、人行^{ひとぎょう}(人形の表記もあり)、小網の集落であった。面河山岳博物館の資料は梅ヶ市の小掠安吉銘であり、それを寄贈した小掠京之臣は人行の木地屋だった。また梅ヶ市の集落道から国道に下ったところにある小掠家では古い足踏みろくろを所蔵していた。こうした面河周辺の木地屋の歴史については郷土史にも多くの記述がある。

『愛媛県史 地誌Ⅱ』の「三 上浮穴郡の木地屋集落」には戦後まで存続した代表的木地屋集落として面河村大字笠方の梅ヶ市を取り上げ、木地業の変遷を概説している。⁽¹⁶⁾ また『面河村誌』、『久万町誌』にも笠方の木地屋集落の盛衰について記述している。さらに『木地師制度の研究』⁽¹⁷⁾ 第二巻にはこの地域に残る古文書や木地屋文書が収録され、詳細な検討を加えている。これらを参照しつつ面河村木地屋の歴史と木地業の変遷をまとめてみた。

まず『面河村誌』によれば、村の記録には享保元年(1716)頃に大字大味川へ木地師の入山があり、次いで大字杣野へ移って盆筒類を作り、次第に盛んになったこと。今でも梅ヶ市には数人の木地細工師がいること、等が記されている。出典は記されていないが明治時代の村の記録のようである。梅ヶ市は大字笠方に属する集落であり、笠方には当時30戸の小掠姓の木地屋がいたという。

その笠方出身の小掠克寛氏が所蔵する年代記「年代鏡」を取り上げたのは『木地師制度研究』第二巻で、その冒頭には次のような来歴が記されている。⁽¹⁸⁾

- 一 我先祖は江州を出、京都に登、それより大和美作に移り、それより四国に渡と聞、
年代数知らず、
- 一 美作より伊予松山領杣野山樅の木移る

九左衛門子 六右衛門

九左衛門墓有

(後 略)

この記録で注目されるのは、面河の木地屋が四国に入る前は美作(岡山県)に居たという事である。年代不明としながらも近江の国を出て京都に登り、大和、美作を経て伊予松山領の杣野山へ渡って来たことがわかる。

また同書にはもう一つ、「小掠重右衛門先祖年代記附録」という文書が紹介されている。これは同じく先祖が面河村の梅ヶ市で木地挽をしていた小掠胤一家に伝わるもので、慶長